

幼児の教育 第114巻 第2号 平成27年4月1日発行 ISSN0289-0836

子ども学の源流を次世代につなぐ

幼児の教育

[特集] 保育現場で気になるコトバ考
「居場所」って何だ？

[保育エッセイ] 子どもは豊かな遊びの世界を生きている
子どもの遊びを丸ごと見るために

[子ども学探訪] 昔むかしのキンダーブック
第五集第五編「あり」を読む

春 2015

since 1901

第114巻 第2号 日本幼稚園協会

保育に迷った時に読む“珠玉のこぼ”集

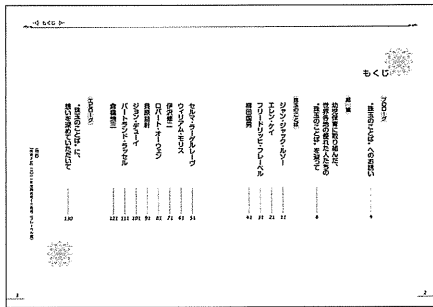
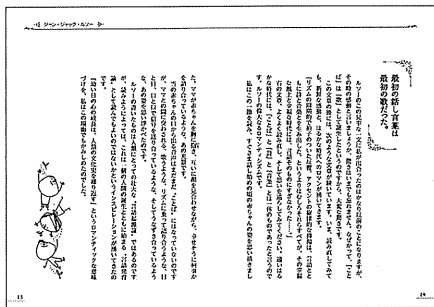


保育がもっと好きになる
保育に生きる珠玉のこぼ

荒井 洌 / 著 定価 本体1,200円+税 19×13cm 132ページ
ルソーやフレーベル、倉橋惣三など、先達が遺してくれた、
保育に生かせるヒントが詰まった「珠玉のこぼ」の数々。
「保育観・子ども観」の道標として役立つ1冊。



10947



荒井 洌の関連書籍

33400

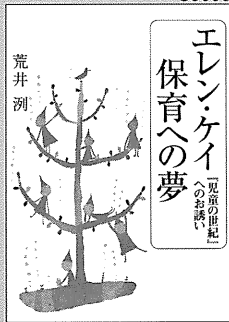


倉橋惣三
保育へのロマン

倉橋は決して古くない！ 日本保育界の巨人・倉橋惣三の思想と理論を、現代の保育現場に活かす道を明らかにした注目の1冊。

定価 本体2,000円+税
21×15cm 220ページ

36600



エレン・ケイ 保育への夢
『児童の世紀』へのお誘い

エレン・ケイが執筆した『児童の世紀』。ここでは、現代の保育や子育てへの素晴らしい示唆が随所に紹介されている。

定価 本体2,000円+税
21×15cm 176ページ

10743



園をみどりのオアシスへ
幼児保育における放牧の思想

北欧保育と今こそ求められている倉橋惣三やエレン・ケイの保育観を融合した、新しい保育のあり方（オアシスとしての園）を提案。

定価 本体1,700円+税
21×15cm 180ページ



わっ

手のなかで

およいでる

子どもの情景

写真

子どもの情景 1

目次 まと

園空間が「場所」になる時 2

特集

保育現場で気になるコトバ考 5

「居場所」って何だ? 4

《view 視野》

放射能災害下の

保育からの学び 関口ほつ江 5

《視点》

子どもたちの

「生きられた時間」と居場所 横井紘子 9

「居」心地のいい

「場所」でありたい 中村共芳 13

適応指導教室から考える

不登校の子どもたちの居場所 加藤美帆 17

《特集 memo》 21

シリーズ

子どもが育つ場所から

一人ひとりを大切にする保育 佐藤寛子 22

実践研究

私の保育ノート

心ひかれるものゝ小さな子どもたちの

日常の中でゝ 中澤智子 28

育休日誌

母になるということ 郡司明子 32

保育エッセイ

子どもは豊かな遊びの世界を生きている ①

子どもの遊びを丸ごと見るために 河邊貴子 36

本棚

古典の散歩道

「こん狐」「狐」 六戸洋子 40

表紙の図柄は、お茶の水女子大学附属幼稚園内にある
ステンドグラスの模様をデザイン化したものです。

目次

「子ども」学探訪

昔むかしのキンダーブック ①

第五集第五編「あり」を読む 吉岡暁子 46

幼児の教育アーカイブズとの対話 ①

画像にみる「幼児の生活」(1)
― 子どもの遊び場を戸外に (昭和五年)

浜口順子 52

論考

学ぶこと自体への欲求に支えられた

現職保育者の学び

― 社会人プログラム「現代保育課題研究」の

受講生へのインタビュー調査から― 児玉理紗

56

幼児の人間関係と保育者のかかわり

― いざこざで起こった泣きの事例から―

柴坂寿子

62

遊びの中で育つ「心」と「体」の健康

― 運動における動きの多様化と洗練化―

宮里暁美

67

EVENTS

イベント・メディア情報・

読者投稿・編集後記 他 71

園空間が「場所」になる時

まど

子ども子育て支援関連三法が今春施行される。乳幼児施設の多様性が保障される一方、制度的複雑さの前に園の運営者も保護者も混乱気味である。

今回、「居場所」って何だ？」を特集した。地理学者 Y. トゥアンは空間 (space) と場所 (place) の違いを論じ、「空間」は根本的に自由で何物にも帰属しないのに対し、「場所」は特定の個人や社会にとって一定の意味や親和性が付与されるものとした (空間と経験)。もし子どもが安心して園生活を送ったりそこに愛着を感じたりできないなら、面積や定数基準を満たしたとしてもそれは、園という名前の「空間」ではあっても「場所」とは言えないことになる。

先日、幼稚園で子どもたちが、遊戯室の一角を自分たちで四角く囲い込み、四歳児が「こゝ、寝る場所！」とうれしそうに飛び込むのを見た。やりたいことに精を出して取り組める自由を大人によって保障された園では、子どもはいつも新たな「場所」づくりに挑み続けている。複雑化する保育制度にかなった園空間を設えることに精力を傾け過ぎると、そこで生活する子どもや大人たちにとって園が本場の「場所」になっているかという問題が、二の次になる。(H)

特集

保育現場で**気**になるコトバ考ら

「居場所」って何だ？

《居場所》は、広辞苑によると「いるところ。いどころ」という意味。でも、《居場所》という言葉には、ほっと息をつけるような響きもあります。家庭や園が、子どもの「いるところ」ではあっても、本当の居場所になっているのかどうか……そこを特集で考えます。



放射能災害下の保育からの学び

関口はつ江

(大学教員)

大人の庇護ひごの下にある子どもたちにとって、生活の場が心身ともに安心できる場であり、その子らしさが十分発揮でき、それが認められるために、大人にできることはどのようなことでしょうか。東日本大震災による放射能災害下で暮らす家族や保育関係者の決断や気付き、子どもの育ちの姿の例は、子どもの居場所に何が必要かについての大切な示唆を含んでいると思います。

大人の覚悟と連帯〜今の状況に向き合う〜

放射能低線量影響下にいる家族は、「そこは子どもがいてよい場所か？」という根本問題に答えられないまま子育てを続けています。今のところ幸いにして健康被害は大きくないとされていますが、将来を含めた安全・安心の保証がないままの暮らしをどう支えてきたのでしょうか。二〇一一年七月の幼稚園保護者への調査で、親は子どもについて、情緒の安定や身体活動に負の影響があるものの、思いやり、我慢する力、家事参加、生活習慣にはプラスの傾向を認めています。その背景として、親としての覚悟と、子どもを守る協力者(園)との

関口はつ江(せきぐちはつえ)
東京福祉大学社会福祉学部保育児童学科教授。郡山女子
大学短期大学部保育科(附属幼稚園長兼務)、鶴見大学
短期大学部、十文字学園女子大学を経て現職。

連帯の意識が、自由記述の中に読み取れます。「避難できる場所があるのにどうしてしないの？」と友人や親類に聞かれる都度、家族が離れ離れにならずにこちらで過ごすことを決めた私たち親の判断は間違っているのだろうか？（と自問する）「今の線量で外遊びを制限するほうが、子どもの体にはよくないと思います。放射能に関しては個人差があるので、他のお母さんには慎重に話します。意識の差がある方のお子さんとは遊ぶ機会が減って、子どもたちは寂しそうです」と葛藤を抱えながら、「震災で嫌なことが多い反面、子どもの意外な成長を発見することができました。自分から洗濯物をたたんだり、……自身で歌を作ったり、遊びを考えて遊んでいます。前の生活だったら見逃してしまう様な小さな発見もありました。外で思い切り遊ばせてあげたいと思いますが、今の生活をできるだけ楽しみたいと思います」「家族で過ごせる幸せや、幼稚園に毎日通える幸せを改めて確認できたように思います。一緒にいられる時間を大切にしたり、やりたいことはなるべく近い時間に完結させたり（先延ばししない）、限りある命や時間やかかわり合いを意識しての生活です」等。そこには共通に、園の先生方の骨惜しみのない毎日の除染活動、保育の工夫や安全管理の徹底への感謝や信頼感が述べられています。^{注2}

保育活動の選択　～安全・バランスか、個々の子どもの経験か～

保育現場では、これまで経験したことのない厳しい条件の中で、子どもの生活の安全とともに調的かつ主体的な発達を目指さなければならぬという、難しい保育実践の経験を通して、保育者は以下のような実感を述べています。

「災害の年は、放射能（災害下）だから戸外遊びができなかった、ではなく、この年はかけがえのない一年だったとなるようにと、和太鼓の活動を積極的にとりいれ、地域との一体感も深まって、子どもたちもよく頑張り、保護者からも感謝され、子どもも大人も達成感を味わいました。しかし、一年たってみて、それは子どもの本当の姿だったのだろうか、大人の自己満足ではなかったかと考え始めました。子どもたちが自由に動けて、好きなことができる生活経験がない中で、太鼓は、子どもにはやらされた活動で、本当に子どもがやりたいことだったのか。この気付きは平常時には意識されないものでした」「戸外活動が制限される中で効率的に運動能力を伸ばそうとすると、室内の環境設定や活動は保育者主導になります。子どもたちは熱心に取り組んではいても、それは自己活動をもって挑戦する機会を奪いかねないし、個人的な活動の発想は出にくくなります^{注3}」「子どもにとって戸外活動の放射能リスクは大きく、外遊びをしない問題も大きい。走り回らないことでの体力や筋力の低下、自然物、生き物とのかかわり不足など。極端に言えば遺伝子破壊の危険をとるか、発達途上の生活経験を後回しにするか、どちらかを正解とする情報がなく、答えが出せないのです。例えば十分の外遊びができたとして、鬼ごっこでタッチされて鬼になって、次に『つかまえるぞ』と勢い込んでいる時に部屋に入らなければならぬという、そんな中途半端な経験をさせるために、遺伝子破壊するかもしれないリスクを背負うかどうか難しいところ^{注4}です」

自分を取り戻す場所と時間

放射能災害下では、大人はとらえどころのない不安を抱え、子どもを守ろうとする意識が

強くなります。多かれ少なかれ戸外にいることの制限によって屋内活動が増え、親や保育者の視界の中での活動になり、活動の共有や相互関係も育ちやすくなります。活動は工夫されました。けれどもそれは子どもにとって他者を意識せざるを得ない環境でもあり、自分で判断して独自に行動することのできにくい環境でもあります。「時間」と言われればすぐに戻り、「そこは駄目」と言われれば決して行かないような、これまで見られなかった子どもたちの聞き分けのよさは、そうならざるを得ないとも言えます。「自分の思いを突き詰めるような遊びができない」「子どもの際立った特徴が出てこない」との保育者の意見からも、子どもが自分を発揮するためには、他者から解放されて自分に集中したり自分を調整したりする時間、自分がよくわかって自由に動ける場所も必要であること、戸外活動の重要性が一層浮上してきました。子どもは、大人がそこを生活の場所と定めた所を、大人への信頼感によって受け入れ、そこに合わせて育とうとします。現代の都市化社会で生きる子どもの居場所には、大人の手の内に入りきらない部分の持つ役割への配慮が特に求められるのではないのでしょうか。

注

- 1 「原子放射線の影響に関する国連委員会報告」二〇一三年
- 2 日本保育学会「災害に生きる子どもと保育」災害時における保育問題検討委員会報告書 pp.101-104
二〇一三年
- 3 日本保育学会企画シンポジウム「鼎談放射能災害下における保育のこれまでとこれから」配布資料
二〇一三年
- 4 郡山市保育園長への聞き取り調査 二〇一四年

視点1

子どもたちの「生きられた時間」と居場所

横井紘子
(大学教員)

子どもたちの「生きられた時間」

子どもたちは、幼稚園で過ごす時間をどのように感じているのだろうか。特に入園当初の子どもたちは、家庭と異なる時間が流れる幼稚園での生活に、戸惑うこともあるだろう。

幼稚園のほうも、入園直後は保育時間を短くし、子どもたちが幼稚園の生活に無理なくなじんでいけるよう、時間的な配慮をすることが多い。筆者が幼稚園で三歳児の担任をした時も、入園直後は、登園時間は九時半、降園時間は十一時で、実質一時間半程度の保育

時間であった。

この一時間半という時間は、入園直後の子どもたちにとって、どのように生きられていたのだろうか。

新しい環境に誘われて遊びだし、一時間半があつという間で、「もうお帰りの？」と言う子どももいるが、玄関でいつ来るかもしれない母親を待ち続け、気の遠くなるような時間を不安な気持ちで過ごす子どももいる。

ほかに、「すぐにお迎えに来るからね」と言われて母親と離れたものの、五分おきに、「ママはもう来る？」と聞く子どももいる。

横井紘子 (よこいひろこ)
十文字学園女子大学人間生活学部幼児教育学科講師。現象学的視点から、保育や遊びについて考えています。

黙々と電車を走らせていたかと思えば、「そろそろお片付けよ」と言うと、急に時間が動きだしたかのように、あっという間に片付けられた子どももいる。

時間の流れは万人に平等だともいわれるが、時間の感じ方は、人によって、また状況によって大きく異なる。現象学では、このような時間を「生きられた時間」とし、時計の時間や客観的な時間とは異なる時間としてとらえている。

ここでは、子どもたちの「生きられた時間」と居場所の関係について、少し考えてみたい。

現在において未来と過去を生きる

時間は、過去から現在、そして未来へとつながっていくものであるが、現在にいなながらも、未来の時間や過去の時間を生きているような場合もある。

例えば、休みに旅行に行くことを心待ちに

して、金曜日からそわそわしている子どもは、旅行に行くという未来を現在においてすでに生きていると言える。そして、月曜日も、まだ旅行の時間を生きているように、旅行での出来事をずっと話している場合もある。

楽しいことだけではない。例えば、給食に苦手なものが出る日は、朝から給食の時間を生きていることになり、どこか気分が沈んだまま遊んでいる子どももいる。

少なからず過去と未来の出来事にとらわれながら、現在を生きているのが人間だろう。しかし、過去や未来の時間を自分の全存在の足場としてしまうと、現在の時間を生きているとは言えない事態にもなってしまう。

幼稚園における時間を生きる

入園直後の子どもたちはどうであろうか。

例えば、先に挙げた、玄関ですっと母親のお迎えを待っている子どもは、母親が迎えに

来るといふ未来を生きている。また、五分おきに「ママはもう来る？」と言っていた子どもは、迎えが「すぐ」来ることを信じ、未来の「すぐ」をたぐり寄せるように問うている。一見、電車で遊んでいるかのように見える子どもも、夢中になっているというよりは、時間をやり過ごしているように感じられる。そして、「お片付け」となると、突然に時間が動いて現在を生き始める印象を受ける。

こういった子どもたちは、幼稚園における現在の時間を充実したものとして生きることがまだ難しい。つまり、幼稚園がまだ居場所とはなっていないのであろう。

現在が生き生きとする時

しかし、だんだんと幼稚園が安心できる場所になってくると、母親の存在がなくなるとも、現在が確かなものとして感じられるようになる。現在を生き始めるようになる。

このように、「生きられた時間」という意味で、幼稚園で過ごす時間を現在として生きる姿が増えてくると、子どもにとつて幼稚園が居場所になってくるように思われる。

また、本当に子どもたちが夢中になつて遊んでいる時は、過去も未来も、そして自分の置かれている状況や状態も意識することがなくなるのだろう。だからこそ、現在が際立って生き生きと感じられ、まさしく、時がたつのを忘れるのであろう。このように、夢中になつて遊んでいる子どもの姿からは、現在の生き生きさと同時に、幼稚園が居場所になつていくことが感じられる。

現在が充実していくことを待つ時

では、夢中に遊んでいない子どもにとつては、幼稚園は居場所となっていないのであるうか。

三歳児の担任をしていた時に、朝に家で頭

をぶつけ、少し気分がのらない様子で登園してきた女児がいた。「大丈夫？ 何して遊ぼうか？」と声を掛けると、「今日は何もしませーん！」と言う。言い方や表情に怒りや悲しみはなく、不満げではあるものの、どこかすがすがしさや、柔らかさもあつた。

そして、女児は砂場近くの軒下に座り込み、少し笑みを浮かべながら周りの様子を見ていた。担任としては気になって、「あつちで遊ぼう」「お砂場やらないの？」などとしつこく声を掛けたのだが、「今日は何もしませーん！」の繰り返しであった。しかし、いつの間にか、砂場に入って遊び始めていた。

遊んでいない子どもの姿を見ると、幼稚園が居場所となっていないのでは、と思ひ、どうにかしなければと焦ってしまった。しかし、この女児の「今日は何もしませーん！」は、「今の私は何もしないの。動きだせる時間待っているから、先生も待つて」という思いの表

われだったのではないか。だとすれば、女児は、過去の出来事や何もしない現在に拘泥していたわけではない。動きだせる未来が現在へと訪れることを自分で期待しつつ、待つていたのだろう。

この女児は、夢中で遊んでいる子どもたちのように、前へ前へと時間を駆り、未来を現在へ吸収するかのように、自ら心身を十分に働かせて、積極的に現在を充実したものにしていくわけではない。そういった意味で、この女児の現在は「厚み」があるわけではなく、時間は淡々と淀みなく過去から未来へと流れ去っている。

しかし、女児は単に流れゆく時間を眺めているだけではなく、じわじわと現在が充実していくことを待つており、未来に対して現在が開かれたあり方をしている。現在が満ちていくことを待ちながら、ただそこにいることが許される場所も、居場所なのだろうと思う。

視点2

「居心地のいい場所」でありたい

中村共芳
(幼稚園教諭)

この場所にはいつまでもいられる、そんな居心地のいい場所と、できるならすぐに立ち去りたくなるような場所があると思います。「居心地がいい」と「居心地が悪い」。何がこの違いを生むのでしょうか。居「場所」といいますが、その場所の居心地を決める大きな要因の一つには、場所にかかわる「人」の存在があるのではないかと考えます。そして、幼稚園教諭として子どもと接している私は、子どもにとって、その「人」であるのだと思います。

私は、二年前までは小学校の教員をしてお

り、その後、幼稚園に異動になりました。小学校との違いについての戸惑いなどはあまり感じませんでした。しばらくして、小学校で子どもと接していた時と比べて、子どもとの物理的距離が近いことに気付きました。

子どもは、「幼稚園」という場所の中に、「保育者」という場所はまた別にあるように感じます。前に、なぜ物理的距離と述べたかという点、私のひざにはよく、子どもが座りに来るのです。そして、座りに来る子どもは、うれしかったことや楽しかったことを伝えたいとやって来ることもあります。少し元気が

中村共芳（なかむらともか）
鹿児島大学教育学部附属幼稚園教諭。子どもの豊かな感性、柔らかな発想に出会えることが楽しみです。

ない子どもが座ってくることも少なくありません。

朝、何という大きな理由はないものの、何となく母親と離れ難いA子がいます。しばらく母親のそばにいた後、何とか「行ってきます」と言って母親と離れたものの、なかなか朝の支度に取りかかれずにいました。私はA子の気持ちが落ち着くのを待とうと思ひ、そばに腰を下ろしました。するとA子は、私のひざの上に座ってきました。私は、そのままA子を受け入れながら、他の子どもも登園を迎えていました。他の子どもたちと朝のあいさつなどをしたり、言葉を交わしたりしていたので、A子に何か言葉を掛けるというよりは、手でA子を抱えながら寄り添っていました。A子は座りながら、他の子どもが保育室で折り紙を折っていたり、積み木で遊んだりしている姿をじっと見ていました。一通り保育室を見渡したころ、A子の表情が落ち着い

てきたので、そろそろ声を掛けようと思っていると、「上靴履いてくる」と言つてA子は立ち上がり、靴を履き替え、そのまま朝の支度を済ませ、好きな遊びを始めていきました。

またある時は、友達といざこざがあり、落ち込んでいたB子が、私のひざへやって来ました。いざこざ自体は、どちらが悪いというものではなく、B子自身もそれをわかっているようでした。だからこそ、友達だけを責めることもできずに、しかし気持ちを落ち着けることが難しいような様子でした。私はB子をひざに乗せ、「嫌だったの？」と尋ねました。するとB子は「うん」とうなずきました。私は「そっかあ」とB子の言葉を受けとめ、しかし、それ以上は語りかけませんでした。B子の表情を見ると、B子は私に、自分の悪かったところを指摘されたいわけでも、友達が悪かったのねと言つてほしいわけでもないと思つたのです。B子は私のひざの上で黙

って座っていました。私も、多く話しかけるわけでもなく、他愛ない話をしたり、周りの子どもと話したりしていました。しばらくすると、「行ってくる」と言って立ち上がったB子。「そう、行つてらっしゃい」と送り出すと、B子は、私を振り返ることなく遊びへと駆けだしていったのです。

私のひざが居心地がいいのかはわかりませんが、ただ保育者として、子どもがいつもより少し調子が出ない時や、ある出来事で気持ちが落ち込んでしまった時に、気持ちを落ち着け、調子を取り戻す場所でありたい、子どもが居心地がいいと感じられる場所でありたい、そう思います。と同時に、「ここなら大丈夫」と、その子が感じられる居場所を園の中でたくさん見つけられるようにしていきたいとも思います。

子どもの周りにいる「人」。保育者のほかにはたくさんさんの「友達」がいます。友達がそ

の子にとつての居場所となった時、幼稚園での生活はさらに広がっていくと感じる出来事がありました。

四月。新入園児のC男は、極度の人見知りのため、園生活に慣れることができたかどうか保護者が非常に心配していました。無口なC男でしたが、進んで登園しているということを保護者から聞き、私は少し安心しました。C男が幼稚園に慣れ、自分を出していけるようにしたいと思いつながら、C男との生活が始まりました。

C男はまず、園の中をいろいろと見て回り、飼育舎に興味を持ちました。そして、C男の幼稚園での一日は、毎朝ウサギに餌をあげることから始まるようになりました。園庭に生えているシロツメクサを採ってはウサギにあげ、採ってはウサギにあげ、ということを繰り返していました。さらに、ウサギに餌をあげ終えると、次は畑の野菜に水を掛けるため

に、水道と畑を何度も往復していました。このころは、保育者にもまだ心を開いていない様子でしたので、私は朝の日課を一緒にしたり、日課をしているところに声を掛けたりするなどして、少しずつC男との距離を縮めていきました。

しばらくすると、C男が私にシロツメクサを何度も何度も採ってきてくれるようになりました。初めて持ってきてくれた時はとてもうれしくなり、この時私は、C男の居場所の一つになれたような気がしました。それから、自分の好きなアニメの話や家での話をよくしてくれるようになり、表情から、初めころよりは緊張が和らいできたように感じています。

C男の生活に変化が訪れたのは七月。同じアニメが好きなD男がいたので、互いの存在や、同じものが好きだということを伝えて、C男・D男交えて話をするような機会を増や

してみました。そうして、友達存在を知ったC男は、次第にD男に心を開いていき、C男の毎朝の日課は、ウサギの餌やりから、テラスでD男の登園を待つことへと変わりました。D男が登園することを心待ちにする様子を見て、また一つ、C男の幼稚園の中での居場所が増えたように感じました。少しずつ、園の中で自分らしく過ごすことができるようになったC男ですが、D男がお休みの時などは、寂しそうな、不安そうな様子が見られます。私たち保育者の元へとやって来ることがあります。C男が居心地がいいと感じられる居場所を、少しずつ増やしていきたい、そう思っています。

保育者が子どもにとって居場所となり、また、友達という居場所をたくさん見つけられるように援助していくことで、幼稚園全体が居心地のいい居場所となっていくのではないのでしょうか。

視点3

適応指導教室から考える

不登校の子どもたちの居場所

加藤美帆
(大学教員)

学校であって学校ではない場所

もう何年か前に、都内にある不登校の子どもたちの居場所の幾つかを訪れたことがある。学校の統廃合により使われなくなった校舎の中には、不登校の子どもたちの居場所として利用されている所が少なくない。街中に点在するそうした旧校舎の一つに足を踏み入れると、学校として使われていた時には子どもたちの声があふれていたであろう、今では剥離した壁や穴の開いた天井など建物自体の傷みも目につく静かな空間が広がっている。しか

し、内部は丁寧に手入れがなされ、教室の中に置かれた卓球台、一人になれるスペース、机の上の作成途中のジグソーパズルなど、学校のように学校らしくない空間にするための工夫が施されている。

今では民間のリーススクールやリースベイスは珍しくないが、「適応指導教室」といわれる、区や市によって置かれている不登校の子どもたちの居場所もある。「適応指導」とは、ずいぶん物々しい表現だが、退職した元学校の先生たちがスタッフになり、子どもたちが通いやすい、居心地のよい空間にするた

加藤美帆 (かとうみほ)
東京外国語大学准教授。専門は教育社会学。主著は「不登校のポリティクス」(勁草書房 2012年)。

めの手作りの工夫をしながら運営をしている所が多い。しかし、さまざまな理由で子どもたちが続けて通うことが難しかったり、また、スタッフに中学生の勉強を十分に見られる人がいない、在籍している学校と適応指導教室の間の連絡がうまくできないなど、運営しているスタッフの努力だけでは解決できないような課題も多い。区や市の運営する不登校の子どもたちの居場所には、学校を中心に考えられている制度のいわば隙間を埋めるような役割が求められているが、多くの適応指導教室は、安定した運営の難しさに直面している場合も少なくない。

居場所の条件

ところで「居場所」という言葉が独特の意味を持って使われたしたのは、一九八〇年代の半ばに、登校拒否の子どもたちのためのフリースクールが徐々に増え始めたところである。

学校でも家でもない「いどころ」を指すのに最もしつくりくる表現として定着していったことがきっかけのようである。そして今日では、社会の中での居心地の悪さや居所の定まらない不安など、居場所を求める人々のありようは、いっそう多様になっている。「職場に居場所がない」「家に居場所がない」など、どこにも居場所を実感できない人々のすそ野が広がっていることは、学校だけでなく、家族、仕事といったさまざまな場——以前は安定した場といわれていたような所なのだが——にも現れている。

居場所とはどのようなものなのだろうか。そこが居場所と言えるには、安心感が得られることに加えて、自分が承認される関係性、物理的な空間が必要であるという。^{注1} インターネットの普及した今日では物理的空間はもしかしたら必須の条件ではないかもしれないが、

単に場所があるというだけではなく、自分という存在が周囲から認められていることが、「自分には居場所がある」という実感につながる。それはつまり、自分が周囲から承認される実感のないことが、どこにも居場所がないという感覚になる。誰からも認められない、時には否定され続けながら生きる寄る辺のなさ、不安など、「居場所がない」とは、自らの声はどこにも届かない閉塞した感覚にも通じるのではないか。

声の共有の場

「ああ、ここに仲間がいたと思った」

不登校の子どもを持つ母親たちにインタビュウをした時に、その中の一人の母親が、親同士の自助グループに初めて参加した時のことを振り返って出た言葉である。その人は、子どもが学校に行かなくなった後、自責の葛藤や周囲からの否定的な反応に苦しんだ時期

があった。そうした中で参加したその会で、似た経験を持った他の母親たちに、自らの経験が共有され受け入れられたと感じたことにより、それまで張りつめていた緊張から解放されたという。その瞬間が、自らの居場所に出会った瞬間として、その人に強い印象を残していたのである。

社会の中心から疎外された人々が、弱さや痛みを共有し、声を発する場を持つこと。それは、力を持つてずにいた人々が、その社会での多数派や支配的な価値観に押しつぶされることなく、自らが立つ足場にもなる。誰ともつながっていない感覚から、声を共有する場へ。居場所を見つけるとは、そういうことかもしれない。

子どもの居場所・教師の居場所

先に、適応指導教室が多く、の難しい課題に直面していることに触れたが、それは「子ども

もはすべからく学校に行くもの」という前提できつちりと作り込まれた仕組みの中で、その仕組みからこぼれた子どもたちに対応しようとする故の難しさとも言える。適応指導教室のスタッフ不足や制度上の裏付けの弱さといった問題も、それらに起因をしている。今の社会には、作り込まれた仕組みの隙間を埋める、もしくは隙間を作るような試みが必要になっていくことも多いのではないだろうか。

例えば今日の学校現場の抱えるさまざまな難しい状況の中で、疲弊し休職に至る学校教師は少なくない。不登校の子どもの数よりも休職している教師の数のほうが多いという、驚くデータもある^{まろ}。

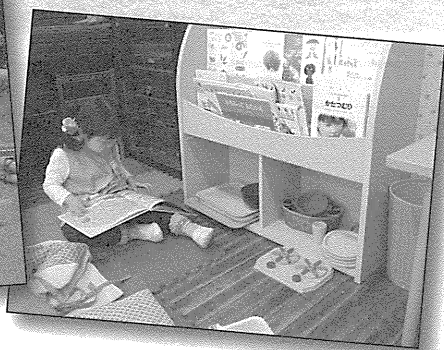
教師の置かれた今日の困難な状況について研究をしている知人が、ある会合で、長期休職した先生たちが職場に復帰するための段階的なプログラムとして、学校に復帰する前に適応指導教室のスタッフを経験するのはどう

か、と提案をしたことがあった。思いも寄らない提案に、その場に居合わせた人たちは一様に戸惑うような表情を見せたが、「僕は真剣にそう思っているんですよ」と念を押すようにその人は話していた。いったん居場所をなくした者同士が、自分たちの声を取り戻す、新しい居場所をつくる。もしも実現したら、既存の学校の枠組みを揺さぶるような、新しい試みになるかもしれない。

注

1 住田正樹編『子どもたちの「居場所」と対人的世界の現在』九州大学出版会 二〇〇三年

2 保坂亨『学校を休む 児童生徒の欠席と教員の休職』学事出版 二〇〇九年



特集テーマを「居場所」に決め、まず、福島の話を知りたいと思った。巻頭論考《View 視野》は、原発事故後の福島の子どもの保育についてずっと調査を続けてこられている関口はつ江先生に書いていただいた。文字通り、子どもをどこで育てるか、子どもが育つ場所、居場所をどこにするのかという、難しく切れない選択を突きつけられた親や保護者たちがこの国に居ること、今も割り切れない思いで暮らし続けていることを忘れてはならない。子どもは通常、親が生活し生業を営む場所の空気を吸って生き始める。自然の匂いや音も、人工物の色や質感さえをも、自らの感性や価値観の素地にしていく。確実に、子どもの最初の居場所に責任を持つのは、大人である。

《視点》で寄稿してくださった三人の先生方は共通して、「居場所」とは、単なる空間ではなく、関係性を意味することを論じている。人は本来、厚みやふくらみなどの体積を持ち、常に脈打ち生成する、ダイナミックで不安定なカラダを生きている。だから、この世界の一角で確実に一定の場所を占めざるを得ないということが、居場所論のポイントなのではないか。人は、周りの世界をある程度は押しつけないとそこには「居られない」カラダであり、その反作用としての摩擦や振動などの葛藤を、いつもカラダとして感じ続けている。そうした葛藤も含めて、カラダがいい具合に世界の中に納まる場を見いだし、外に向かって新たな関係を結ぼうとする準備態になることが、ウエル・ビーイング（よく居ること）だと言えるだろう。（H）

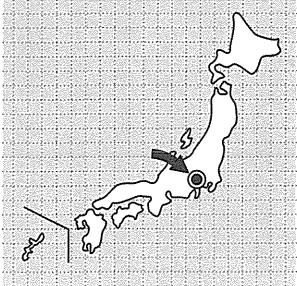
シリーズ
子どもが育つ
場所から

一人ひとりを大切に する保育



元町幼稚園（神奈川県横浜市）

時代の流れや社会状況の変化を受け、戸惑いながらも、その時々生きる子どもたちの「今」を見つめ、常に子ども主体の保育を追求し、実践してきた元町幼稚園。保護者と連携し、楽しみながら保育をしているこの園の今の暮らしぶりをお届けします。



今号のレポーター
お茶の水女子大学附属幼稚園
佐藤（文責）、伊集院、石川、灰谷の4人で訪問しました。降りしきる雨の中、気持ちよく受け入れてくださった元町幼稚園に感謝の気持ちでいっぱいです。

元町幼稚園を訪ねて

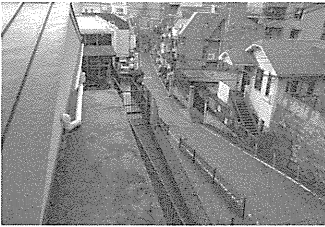
秋のある日、神奈川県横浜市にある元町幼稚園を訪ねた。JR根岸線石川町駅で下車し、おしゃれな元町商店街の中心部を右に曲がる、汐汲坂という急な坂がある。

その日はあいにくの雨。坂道に行く私たちの前には、傘を差した男児が、おばあちゃんの手をつなぎながら歩いていった。

「今日は、雨だから外では遊べないかなあ」「お部屋でも楽しいことあるのじゃない？」

幼稚園までの道のりをのんびり歩きながら、今日一日何をしようかと思いを巡らせている様子が伝わってきた。

これから始まる元町幼稚園の子どもの時間、どんなドラマが待ち受



▲汐汲坂

けているのか、ドキドキしながら後を歩いた。坂の中腹まで行くと、「おはようございます」とさわやかな声が聞こえ、副園長の加藤先生が笑顔で私たちを迎えてくださった。

保育を見つめ直してきた歴史

元町幼稚園は、一九〇九（明治四二）年、私立横浜高等女学校の附属幼稚園として設立された。関東大震災で全校舎が焼失し、その後、中断期間があり、一九五七（昭和三二）年に地元の人々の要請で再開した、歴史ある幼稚園である。注目すべきなのは、再開園から今日までの五十余年、常にその時々の子どもたちの姿を丁寧に見取り、自分たちの保育はこれでよいのだろうか、と、研修を重ねてきたその姿勢にある。

再開園から二十年を経た一九七七年、それまでの行事中心・保育者主導の保育に対して疑問を感じ始めていた保育者たちは、何気な

く手にした雑誌『幼児の教育』の中に、「お茶の水女子大学幼児教育現職研究会のお知らせ」の記事を見つけた。そして早速、毎週火曜の夜、横浜から東京まで、研修に出かけることにしたのである。

保育に対する疑問の声を最初に上げたのが、現場の若い保育者であったこと、保育が終わった夜に保育者全員で研修を受けることにしたこと、午前六時から八時までと二時間もの研修を受け、横浜までの帰りの電車の中で、保育者同士が明日の保育にどう活かそうかと考えを巡らせ、議論を交わす様など、興味深いその当時のことについては、『保育の見直し』1000日の実践記録』（大戸美也子・横浜学園附属元町幼稚園 フレーベル館）を参照いただければと思う。

坂を挟んだ特徴ある園舎

元町幼稚園は、汐汲坂の中腹、坂を挟んだ

左右に園舎が

ある。坂を見

上げた右手は

三階建ての建

物で、一階に

年長保育室が

2つ、二階に

は職員室や園

長室、事務室、

そして年少の

一クラス、三

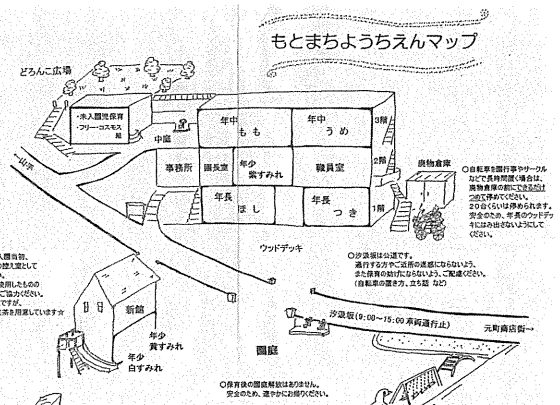
階は年中保育

室2つが配置

されている。坂の左手に新館と呼ばれる二階

建ての園舎があり、一階に年少のもう一クラス、二階は保護者の控室として利用できる空間がある。坂の傾斜を使った造りになっているので、通りからそれぞれの階に出入りできるようになってい

る。また、右手の奥には離れ



▲図1 元町幼稚園マップから

があり、未入园児の保育や預かり保育の部屋として使用しているとのことだった(図1)。

慣れない私たちにはやや複雑に感じる空間だが、晴れた日には、子どもたちは、園舎の上下はもちろんのこと、坂を挟んだあつちとこつちを自由に行き交い遊んでいるようだ。

坂はまるで幼稚園の敷地内のようにだが、地域の人の通り道でもあるので、子どもたちにとっても地域の方にとつても気持ちよく安全に行き来ができるよう、卒業生の保護者が交代で見守っている。

その日も雨の中、レインコートを着た親子が、坂の途中で足を止め、両側の園舎から聞こえる子どもたちの声に耳を澄ませ、「お兄ちゃんたち、遊んでるね」と話しながら歩く姿が見られた。

一人ひとりを大切にした保育

降り止みそうもない雨の中、登園してきた

子どもたちは、それぞれの保育室に向かい、身支度を済ませると、思い思いに遊び始めた。

最初に訪れた年中組では、三階の二クラス分のスペースをオープンにし、製作、お店屋さん、ままごと、粘土、ブロック、積み木、線路遊びと、空間を分けて、子どもたちが好きな遊びをしていた。

皆が生き生きと動いている中で、大型積み木で作った乗り物の中に入り込んで出てこない男児がいた。

表情もやや硬い。担任の保育者が様子を気にしながら声を掛け、他の子どもと一緒に、新聞で作ったハンドルやシートベルトを持ってきては男児に見せ、さりげ



▲年中組保育室

なくハンドルを置いて、その場を離れた。

少しして男児は、中から手を伸ばしハンドルを手にとると、それを持ったまま、声を掛けてきた保育者とその周りにいる子どもたちの様子を目で追い始めた。そして、乗り物の中から自分で出てくると、保育者にトイレに行きたいことを伝えた。

トイレを済ませ、はみ出したシャツを保育者に丁寧を整えてもらっている時の男児の表情は、先程までとは全く違い、穏やかに和らいでいて、そのまま製作コーナーに行くと、周りの子どもたちに交ざり、製作を始めた。

この男児が、転園してきたばかりで、今日初めて幼稚園を訪れたということは、後から聞いて知った。初めての空間、初めての人の中で緊張する彼の気持ちを受けとめ、無理に誘うことなく、彼のペースで自然に遊びの輪に入っていくことができるように援助する保育者の丁寧なかわりがそこにはあった。

一階の年長クラス

では、女児二人が机に大きな布を広げ、型紙を置いて線を引き、切り取り、レースやビーズをあしらいい、スカート作りをしていた。ポンドが乾くように、保育者は一つ一つハンガーに掛け、窓辺にきれいに飾る。女児たちは自分たちの作品がうれしくてたまらない様子で、参観の私たちにも「素敵でしょ！ 私が作ったの」と声を掛けてきた。

その後、向かった年少保育室では、友達とのかかわりが楽しいことに気付き始めた三歳児が、紙テープの電車に乗り込み、保育室の中をあっちへ行ったりこっちへ来たり。途中テープが切れて保育者に修理してもらうのも



▲スカート作り（年長児）

心ひかれるもの

小さな子どもたちの日常の中で

中澤智子

(保育士)

私は、〇〜二歳の子どもたちが集う学内保育施設、いずみナーサリーで保育士をしています。ナーサリーではかねてから、小さな子どもたちの表現遊びについて、大学の先生方との研究会や協同アート活動を通して実践研究を重ねてきました。私たちが気付かず見過ごしていた一瞬の表現をとらえると同時に、カタチとして残らないプロセスを大事にするデザインの先生方の視点、日々の同僚との会話や研究会での対話などにより、いつも新しい気付きがあり、次はこうしてみようかと話し合いながら試行錯誤を繰り返していました。

その時の子どもの背景にあるものや本質に迫るようなやりとりがなされることもあります。が、色使いや、どんな素材を加えたらもっと面白くなるだろうかなど、表面的な話に留まることも多かったなと今になって思います。

そんな中、「ライフ&アート展」(お茶大関係者によるアート教育実践展覧会)に私たちも出展することになりました。ここで一度『日常』に立ち戻り、子どもたちが過ごす日常の中で何を見つけ、どんなことに面白さを感じ心ひかれているのか、子どもたちの過ごす日々を丁寧に見直してみようと思いました。

少しずつ少しずつ

パツと手を開くと

一瞬のうちに

手の中の砂は

なくなるけれど

ゆっくりと 慎重に

地面へと向かっていく

ひとすじの砂

砂の行方は

地面 ベンチ 葉っぱ…

葉の上に落ちる砂は

雨の音に似ていた

砂の重みに耐えられず

ザザッと

落ちてしまった

今度は落ちないように

手を近づけてやってみる



手で感じる 手が感じる

土の上に手を置くと

ほんのりとあたたかく

やわらかい

心のままに

手が動き出す

てのひらに 指先に

あるときは

力をこめ

あるときは

流れにまかせる

手が生み出す砂模様は

どんどん変わっていく

変わっていくから

おもしろい

今 この瞬間



こんなに小さな：

子どもの小さな手に
小さなからすのえんどう
中から
小さな豆がでてきた

春先には

ピンクの小花だったのが
緑の実になっているのを
豆好きの子が みつけた

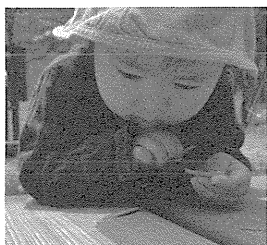
しばらくして

緑の実が

茶色くなったことに
気がつく子

時の流れを

小さな手が みつけた



名残雨で：

地面はすっかり乾いても
まだ残っている
雨を みつけた

暑い日差しの

下で みつけた

てのひらと

指先と

水で おえかき

とうとう 雨は

マンホールの

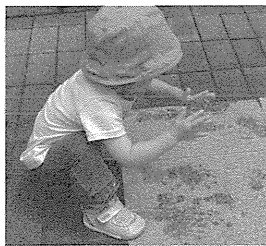
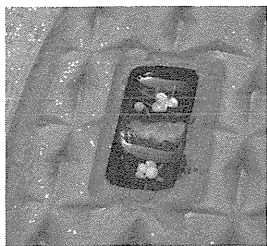
溝だけに

なってしまった

そこでは

豆（注釈…草の実を

ゆでていた



おもしろいと感じること

味噌汁に入れる玉葱の皮むきをした

むいた皮を小さくちぎり 並べていく

紙の上で 玉葱の皮アートが始まった

むくことが楽しい子

むいたものをさらに小さくする子

どこに置こうか並べようか思案する子

むいた玉葱を転がす子

転がる音 転がり方 転がる行方

おもしろいと感じることは

その時その子によって

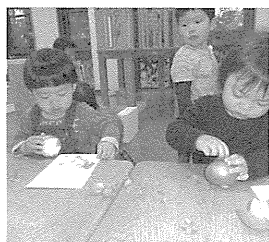
それぞれ

そして

友だちが

夢中になっている姿も

心惹かれること



子どもたちの周りには、「面白いこと」「きれいなこと」「不思議なこと」……と心動かされることであふれています。子どもたちの心に響いていても、私たち大人が気付いていないこともたくさんあることでしょう。また

その一方で、不用意に声を掛けてしまい、静かで大切な時間を壊してしまったり、日常を通り越して特別なことに気持ち先走ってしまふこともありました。

子どもたちのまなざしや表情、そして小さな手から垣間見られるライフ&アートの世界を写真と共に振り返る中で、

子どもたちの日常を大切にしたい

という当たり前のことですが、これがなかなか難しく、まだまだできていなかったな……と改めて思います。初心に戻り、地に足をつけて、子どもたちの過ごす日常を、大切に丁寧に、共に過ごしていきたいと思っています。

母になるところ

郡司明子
(大学教員)

八月初旬、元気

な男の子を出産し、
母になりました。
といっても、母と
子の関係づくりが
始まった、とい
うのが実感です。



「はじめから母親がいるのではなく、赤ちゃんが母親にしてくれる。教師も同じ。子どもが教師にしてくれるから大丈夫」。立場は関係性によって成り立つというこの言葉に支えられ、私は教員の道に。そして、今、母になる

べくしてわが身に起きていること、とても私的な出来事から、人はどうやって母親になっていくのか、四回にわたりつづつてみたいと思います。

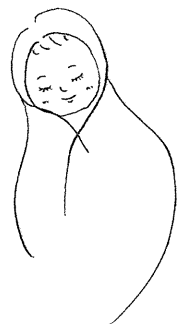
0日目…その時は突然に

まさかこのタイミングで陣痛が始まるとは思っていなかった時に……。それでも今思えば、出産前に必須だった原稿を送り、実家から母の登場を待ち、万事準備が（一応）整った段階で降りてきてくれたのは大したもの。Yの泣き声が聞こえた時には安心して一気に

郡司明子（ぐんじあきこ）

群馬大学准教授。専門・美術科教育。小学校教諭を経て現職。身体性を重視したアート教育を実践研究中。

からだがおぼれた。
その後、夫に見守ら
れる中、胸の上にY
を抱いて初乳を飲ま
せた時の満ち足りた
喜びは一生涯忘れない。



命の重みと温かさを肌で感じた時。

6日目：痛みは続く

退院後もしばらくは、すべてが痛みに支配
されていた。私は、出産後ひたすら養生しよ
うと決めていた。しばしネット環境はおさら
ば。テレビもつけない暮らしに、Yと共に神
聖な別世界の住人になったよう。

15日目：国宝級の作品

(Yにとつての)祖母の抱っこはやはり違う。
Yは安心してくーっと眠りに入る。この時期

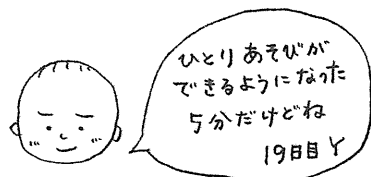
の私は抱き方がおぼつかず、そうはいかない。
祖母がYを布団に寝かしつける時は、国宝級
の作品を扱うかのように、ゆっくりと丁寧に
慎重に。恐れ入る。

20日目：Yのまね

Yのことを内側から理解しようと一挙手一
投足、頭からつま先までまねし
てみようかと努めてみた。手足バ
タバタ、首を左右に、口をもぐ
もぐ、動かない箇所はないほど
にフル稼働。赤ちゃんは全身全
力で生きている。

21日目：寝て過ぎていながら……

考えていたのがケア論のこと。
母乳の仕組み。私は時折、母乳
トラブルに見舞われる。張るし、



詰まるし。産院でもマッサージケアをしてもらった。助産師さんいわく「それでも赤ちゃんに飲んでもらう以上の効果はないんです」とのこと。私はYにおっぱいをあげているつもりが、実はYに飲んで（マッサージして）もらっていたのか！人間にはケアの要素が根本的に仕組まれているのだなあ。

23日目：親子のつながり

Yのからだは私の母乳でつくられる。私の母乳は祖母がこしらえる食事からつくられる。親子三代でつながる食の連鎖。おばあちゃんの知恵、料理、歌、抱き方、なだめ方、あやし方、そういうのが代々伝わってきたのだとしみじみ思う。そう、祖母がYに歌って聞かせていた「からす」の歌、出産を経て、初めて私はわが家を横切るカラスの存在に心から共感した。カラスも、かわいい子、があるのよね。

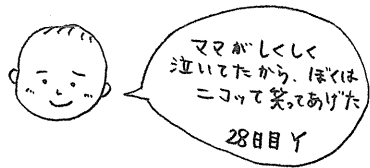
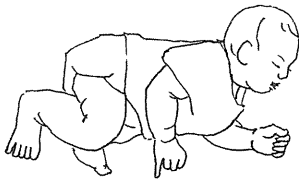
25日目：わずかな変化にも

ホイップクリームのような白いちっちゃい手。日に日に0・5ミリずつ伸びていくまつ毛。Yのふとした変化に気付くことがうれしい。

30日目：創造の根源

（インスピレーション）は赤ちゃんから？

Yを見ていると、お地藏様に見えたり、阿修羅像に見えたり、はたまた雲中供養菩薩（平等院鳳凰堂）に見えたりしてくる。ある日の寝姿は、キース・ヘリングの描く「ベイビー」。人が織り成す創造活動と赤ちゃんの存在＝生命力は無縁ではないはず。



38日目：音楽教育は何のため？

Yを抱っこすると、自然に幼いころから親しんでいる歌が口をついてくる。「うみ」「チューリップ」「ぞうさん」等々。音楽家の井上武士氏は、こんなふうに言っている。「私は音楽を学んだことを喜ぶというよりは、音楽に感動する心を持ったことをうれしく思います」。今の私はわが子に歌を歌ってあげたくなる心を持たせてもらったことに感謝したい。

59日目：母子像

「世の中で最も美しいといわれる形は母親が赤子を抱く姿」と聞いたことがある。そして私は最近、人間の手首が曲がるのは赤ちゃん



を抱くためなんだ、と思える瞬間があった。古今東西の母子像を調べたくなった。

82日目：こぶしの研究

こぶしを発見してからというものの、研究にいそしむY。こぶしをじっと見つめる、口を持っていく、その感触を丹念に味わい尽くす。時には的が外れて、こぶしが鼻やほっぺたに。すると自身の研究行為に憤慨。赤ちゃんは立派な研究者だと思ふ。

— 続く —



ぼくのオムツを替えている間にママはかぼちの金魚をこがしたよ
90日目 Y

ママは10/10のお弁当がペリペリで朝から忙しそう...
ぼくのこと見ても!
64日目 Y



子どもは豊かな遊びの世界を生きている①

子どもの遊びを丸ごと見るために

河邊貴子

(大学教員)

豊かさを、丸ごと

どうして遊びは子どもにとって大切なのか。どうして幼児教育では遊びを教育に位置付けているのか。その有用性を言葉で論理的に説明しなければ、「遊びは役に立たないもの」として排除されかねない空気が漂うようになってきた。「遊びは幼児期の重要な学習である」と位置付けるならば、学習効果を証明しなければならぬというわけだ。

確かに子どもたちは遊びながら発達に必要な体験を積み重ねている。その「効果」を明らかにすること自体は難しいことではないと思うし、現代において必要不可欠な仕事だと思う。何かしらの視点を提案して遊びの有用性を説明することは可能であろう。遊びの大切さへの認識を維持深化させていくために、非力ながら私も、遊びの質的な深まりを読み取るための視点を考えている最中である。

けれども、遊びを分析的に見る一方で、効果や有用性といった言葉を抜きにして、子ども

河邊貴子（かわべたかこ）

聖心女子大学文学部教授。専門は幼児教育学。主な研究課題は保育記録論、遊び援助論。医療と地域と子どもをつなぐ NPO 活動もライフワークの一つ。

の遊びの豊かさを丸ごと語りたいたいという気持ちもむくむくとわいてきている。

せつかく頂いたこの紙面。ただひたすらに、子どもの遊ぶ姿の面白さを追ってみることにしようと思う。なぜなら、子どもというのは本当に面白くて、彼らの遊びはオソレイリマシタと言いたくなるようなことの連続だから。

子どもには世界がどのように見えているのか

子どもの目には世界がどのように見えているのだろうか。

あるお母さんが、子どもと図書館に行つて、トイレに連れて行つた時のエピソードを報告してくださつた。

「杖を使っている高齢者の方のために、トイレの洗面台に、杖をここに置いてください、と表示付きのフックがあつたんですけど、うちの娘はそれを見た途端、目を輝かせてこう言つたんです。『お母さん、すごい、この図書館には魔法使いも来るんだ!』」

本当に、魔法使いが来るような図書館だったら、どんなに素敵なことだろうか。私たち大人は「便利さ」や「効率の良さ」という視点で身の回りの環境を見がちだけれど、子どもの目には、世界は少し違って映っているのだろう。そのものをそのものとしてだけ見るのではなく、そこから始まる物語を面白がるまなざしが、子どもの中には内蔵されている。だからどこにいてもどんな時にでも遊びだすことができる。そんな子どもの傍らにいと、世界は面白さと喜びに満ちていることに気付かされる。

子どものまなごしの豊かや

しかし、子どもは世界をいつも明るく見ているばかりでもない。自分の遊びの原風景をかかのぼってみると、さまざまな言葉にできない感情を抱えていたことが思い出される。

私は、幼稚園には在園期間の半分くらいしか通園しなかった。信州伊那谷の小さな集落に住む祖母が病気になる、嫁である母が看病に行くことになったからである。姉は小学生だったので近所の家に預けられ、四歳の私と二歳違いの弟は信州の山の中で暮らすことになった。隣人が他人の子どもを預かってくれる、いい時代だった。

幼稚園を無期限休学となった私は、看病に忙しい母の目の外で、村の子どもたちと朝から日が落ちるまで、野山を駆け回っていた。

村の真ん中をやがて天竜川に注ぐ小さな川が流れていて、一本の橋が架かっている。その橋をめぐる川向こうの集落の子どもとの激しい泥団子戦にオミソとして参加したり、村の人の田植えの傍らで泥遊びをしたり。家ではお蔵の前の三和土をままごとの場所と決めていて、野草を摘んではご飯作りをしていた。三和土のひんやりとした感触を、今でも、いつでも、思い出せる。

一人遊びの時間も長く、二時間に一本、町からやって来るバスが山間を見え隠れしながら走るさまに手を振ることさえ遊びだった。

私の体はいつも地べたの近くにあり、ほとんど自然の一部だった。

そんな躍動的な記憶が鮮明である一方、どうにも表現できないような感覚も心に刻み込ま

れている。

村の人は日中の暑いさなかには野良仕事をしない。昭和三〇年代の農家の仕事は機械化されておらず、その労働は今以上に過酷なものだったろう。お百姓さんたちは昼ご飯の後の二時間余り、体を休めるために昼寝をする。

子どもの私は遊びたくて仕方がない。真つ昼間に外に出ると、村は静まり返っている。

焦げ付くような日差し

ビーチサンダルの底が溶けそうに熱したアスファルトの道

立ち上がる陽炎とうるさいほどの蝉せみ

死んだように眠る村の真つただ中で、私だけが「生きて」いる。異世界に迷い込んだような心細さと、遊びたい気持ちの強さのはざままで立ちすくんでいる自分がいた。

時々、私の中の「四歳児の私」が語りかける。

子どもというのは明るくて元気で、遊びに夢中になっているばかりではないよ。明るい故に、逆光で周囲が真つ暗に見えてしまっような怖さを対比的に体験しているかもしれない。生と死が意外に近いことに気付いているかもしれない。そして、子どもなりに、いや子どもだからこそ、言葉で十分に表現できないからこそ、ある強烈な「一瞬」を、一枚の画像として心に抱えるかもしれない。だから、小さな子どもには、心を留めて、丁寧に向き合わなければならないのだと。

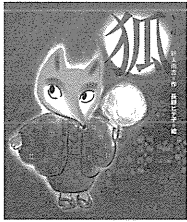
子どもの遊びの世界を丸ごととらえようと思ったら、小さな子どものまなざしは、大人が考える以上に多様で豊かであることを理解しておく必要があるのかもしれない。



『ごんぎつね』 新美南吉 作
黒井健 絵 (借成社 1986年)

「ごん狐」「狐」

新美南吉 作



『狐』 新美南吉 作
長野ヒデア子 絵 (借成社 1999年)

評者

穴戸洋子

(元幼稚園・短大教員)

新美南吉の幼少年時代

「ごん狐」「手袋を買いに」の代表作で知られている新美南吉（本名・新美正八）は、一九一三（大正二）年、愛知県半田市岩滑^{やなべ}で、豊職人の父・渡辺多蔵、母・りゑの次男として生まれた。長男はわずか生後十八日で亡くなっている。母・りゑは病弱で、南吉が四歳の時、二十八歳の若さで亡くなった。

南吉が五歳の時、父親は後妻を迎える。翌年弟が生まれると、南吉は生母の実家、新美家に養子に出される。ここは半田の村はずれで、周囲は田んぼばかり。祖父もすでに亡くなり、生母の継母・新美志もが大きなかやぶきの家で一人で暮らしていた。血のつながりのない祖母との二人だけの生活の寂しさ、幼くして養子に出された心の痛手に耐えられなかった南吉は、わずか五か月足らずで、父親と継母と異母弟のいる岩滑に戻る。しかし、

穴戸洋子（しどようこ）

半田市立幼稚園長、名古屋短期大学教授を経て、現在、あいち保育研究所で保育の実態調査など研究活動を継続。

戸籍上は新美家の養子で、以後亡くなるまで、父親の渡辺姓ではなく新美の姓であった。

成績優秀だった南吉は、小学校の卒業式で答辞を読む。最後に「たんぼぼのいく日踏まれて今日の花」という俳句を入れ、参列者に感銘を与えた。当時、ほとんどの生徒が、小学校を卒業すると二年間の高等小学校に進んだ。五年間の旧制中学校へ進学するのは、ほんの一握りの富裕階級の家庭に限られていた。畳屋の職人の息子が中学校に進学することなど考えられない時代だった。しかし、小学校の先生たちの熱心な説得で、ようやく両親も中学校に進学することを認めることになる。

中学校に進学した南吉は、文学に興味を持ち、鈴木三重吉、北原白秋の主宰する雑誌『赤い鳥』をはじめ図書館の本をむさぼるように夢中で読み、その影響を受け、童話、童謡、詩、小説を書きためていく。そして、『赤い鳥』『コドモノクニ』『少年倶楽部』などの雑誌に精

力的に、ペンネーム「南吉」の名で投稿する。やがて作品が掲載されるようになり、南吉は、自分の文学の才能に自信をつけていく。

一九三一年、成績優秀で中学校を卒業し、授業料免除の岡崎師範学校第二部を受験するが、身体検査で不合格。失意の南吉は、四月から八月まで母校の小学校の代用教員になる。このころの教え子たちは、南吉からたくさん自作の童話を聞いた、と後に語っている。

東京外国語学校時代

北原白秋の門下生・巽聖歌（たつみせいか）は、『赤い鳥』をはじめ児童文学雑誌にたびたび投稿し、入選し掲載される若い南吉に早くから目を留めていた。氏の同人雑誌『チチノキ』に南吉が加入するのをきっかけに、聖歌は南吉に東京に来るよう勧める。そして、本格的に文学を学ぼうと志していた南吉は、聖歌の家に下宿し、東京外国語学校を受験し合

格。両親を説得し東京に出て行くことになった。一九三二年、東京外国語学校英語部文科に入学。この年『赤い鳥』一月号に「ごん狐」が載る。聖歌は南吉に、大正、昭和初期の童謡、童話、児童文学を築き上げた鈴木三重吉、北原白秋、与田準一、小川未明、坪田譲治らを紹介したり、東京を案内し、親身に世話をする。南吉も『チチノキ』の編集を手伝いながら、「手袋を買いに」「デンデンムシ」「大岡越前守」等を書き、東京の生活を謳歌していたが、一九三四年、一回目の咯血をする。一九三六年三月、成績は優秀だったが、軍事教練に出なかつたため志望の中学教員になれず、神田小川町の雑貨貿易、商工会館に勤める。しかし十月、二度目の咯血をし、帰郷する。

帰郷、安城高女時代から「く」になるまで

東京での文学活動の夢破れ、帰郷せざるを得なかつた南吉の悲しみはいかばかりだった

か。しかしそれ以上に父親、継母の失望は大きかった。旧制中学校に行かせ、さらに東京の大学に進学させ、無理に無理を重ね、それでも南吉の将来に夢を託してきた。それが職を失い、それどころか病気で帰ってくるとは。

当時、結核は伝染性の強い病気として恐れられていた。今のように良い薬はなく、滋養をとり、ゆっくり休養をとることのみが唯一の方法だった。しかし南吉は、両親の嘆きの中で毎日、針のむしろに座っているような状態で、十分に体が回復していかないのを知りながら就職活動を始める。

四月から河和小学校で代用教員に採用され、ひとときの幸せと安らぎを得るが、七月で終わりになる。九月から杉治商会で鶏のひなの世話をする仕事に就くが、月給は手取り十六円と安く、寮には冬、火鉢も無く体にくたえ、肉体的にも精神的にも経済的にも最も苦しい失意の二年間だった。

一九三八年四月、中学校の恩師の計らいで、安城高等女学校に勤務することになった。「父も母もあまりの喜びで、狂い出さねばいいと、そんな心配をした」と、南吉はその喜びを異聖歌に手紙で書いている。月給七十円と経済的にも安定し、心にも余裕ができ、希望を胸に新生活を迎える。

生徒の英語と作文指導をしながら「良寛物語 手毬と鉢の子」「おじいさんのランプ」を出版し、ようやく世の中に注目され始める。しかし喜びもつかの間、一九四二年、腎臓が悪くなり血尿が出る。死を意識し始めた南吉は、「牛をつないだ樁の木」「花のき村と盗人たち」「狐」等次々に書き上げる。一九四三年二月、人生で南吉が最も安定し、楽しく輝いていた安城高等女学校を退職。死を覚悟して、手もとにある未発表の作品を遺書とともに異聖歌に送る。三月二十二日、永眠。二十九歳八か月の若さだった。

作品に流れる母への想い

短い南吉の生涯であったが、この中で、童話約百編、小説三十五編のほか、詩、童謡、俳句、短歌の作品がたくさんある。

いちばん母親が恋しい幼児期に母を亡くし、さらに養子に出された寂しさ、つらさ、悲しさ、やるせなさ、母親を慕う南吉の気持ち、南吉の全作品の根底に流れている。その中で、今回は、狐の登場する「ごん狐」と「狐」を取り上げてみる。

「ごん狐」では、兵十が病気の母親のために苦勞してとったウナギを、狐のごんがいたずらをして取ってしまう。その母親が死んで、兵十はごんと同じように独りぼっちになってしまう。罪を償うため、ごんは、栗や木の実を兵十の家にこっそり届ける。しかし、兵十にはごんの気持ちを通じず、鉄砲でごんを撃ってしまう。その時、土間に置かれた栗が兵

十の目に留まる。「ごん狐」の最後はこう結ばれている。「ごん、お前だったのか。いつも栗をくれたのは。」ごんは、ぐったりと目をつぶったまま、うなずきました。兵十は、火縄銃をぱたりと、とり落しました。青い煙が、まだ筒口から細く出ていました。』

幼くして母と死別し、養子に出された南吉と兵十、狐のごんには、共通の孤独感があり、まさに一心同体になつている。お互いを理解しようとしながら、どこかすれ違つてしまふ不条理さが伝わってくる。

「狐」はあまり知られていないが、南吉の最晩年の作品、なぜか私の心をとらえて離さない。その内容は……

月夜に七人の子どもが、半里ばかり離れた村へ、夜のお祭りを見に急いで歩いていたら、やせっぽちで色の白い、一人っ子で甘えん坊の文六ちゃんが、大きい母親の下駄を履いていて遅れてしまふ。文六ちゃんのお母さんか

ら文六ちゃんの下駄を買うよう子どもたちは頼まれていたので、道端の下駄屋に入り新しい下駄を買った。その時、腰の曲がつたおばあさんが「晚げに新しい下駄をおろすと狐がつくというだに」と言いながら入ってきた。子どもたちは「嘘だい、そんなこと」「迷信だ」と否定したが気になって、お祭りも十分楽しめなかった。帰りも月夜だったが、誰もしゃべらなかつた。黙々と歩いていたその時、文六ちゃんが「コン」と咳をした。子どもたちは、文六ちゃんが狐になつてしまったと恐ろしくなつた。そして、いつもは甘えん坊の文六ちゃんを家まで送っていくのに、みんなさつさと自分の家へ逃げるように帰ってしまった。いつもと違う友達の様子に心配になつた文六ちゃんは、お母さんに「もし、僕が、ほんとに狐になつちゃつたらどうする？」と聞く。「父ちゃんと母ちゃんは相談をしてね、かわい文六が、狐になつてしまったから、わ

したちもこの世に何のたのしみもなくなってしまうたで、人間をやめて、狐になることにきめますよ」……「そんなことをしているうちに、犬がすぐうしろに来たら？」「それなら、母ちゃんは、びっこをひいてゆつくりいきましよう」「どうして？」「犬は母ちゃんに噛みつくでしょう、そのうちに獵師が来て、母ちゃんをしばってゆくでしょう。その間に、坊やとお父ちゃんは逃げてしまうのだよ」「いやだよ、母ちゃん、そんなこと。せいじゃ、母ちゃんがなしになってしまっじゃないか」『文六ちゃんはわめきたてながら、お母さんの胸にしがみつきました。涙がどっと流れて来ました。お母さんも、ねまきのそででこっそり眼のふちをふきました、そして文六ちゃんのはねとばした、小さい枕を拾って、あたまの下にあてがってやりました。』と終わる。

この「狐」は、死期が近づいていることを感じながら書かれた作品である。初期のころ

書かれた「ごん狐」「手袋を買いに」と同様に母の愛というテーマが一貫して流れている。おわりに、南吉の母親への想いをつづつた詩を紹介する。

天国

新美南吉

おかあさんたちは みんな一つの、天国をもっています。どのおかあさんも どのおかあさんももっています。それはやさしい背中です。どのおかあさんの背中でも 赤ちゃんが眠ったことがあります。背中はおうちこつちにゆれました。子どもたちは おかあさんの背中を ほんとの天国だとおもっていました。おかあさんたちは みんな一つの、天国をもっています。

参考文献

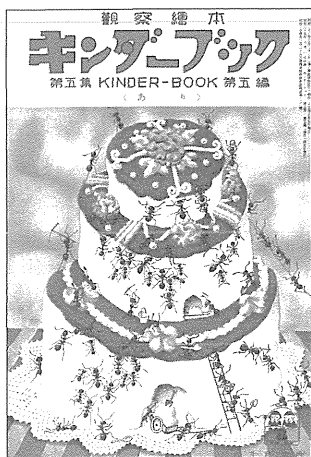
- 1 異聖歌『新美南吉の手紙と生涯』英宝社一九六二年
- 2 新美南吉全集編集委員『校定新美南吉全集』第一
十二巻・別巻 大日本図書 一九八〇～八三年

昔むかし の キンダーブック ①

第五集第五編「あり」を読む

吉岡晶子
(元幼稚園教諭)

『キンダーブック』は、今に至るまで八十年以上もの間、おそらく世界で最も長く発行され続けてきた「教育絵本」だ。この新連載は、「昔むかしのキンダーブックはね……」と、かつて子どもだった私たちに、再び「読み聞かせ」してもらおうしさを思い出させてくれるだろう。(編集委員会)



▲画像1 表紙 (武井武雄 画)

戦後復刊されたキンダーブックを数冊見る機会があった^{※1}。その中で表紙の絵にひかれ思わず手にとったのが、この第五集五編(昭和二五年八月発行)「あり」であった。六十年以上前のものである。

春から夏にかけて、たくさんいる小さいアリ。いつも忙しそうで、行列には思わずついて行きたくなり、巣の穴の中、見えない世界は好奇心をくすぐる。子どもたちとかかわり深いアリについて、どう描かれているか、教場面を紹介しながら見ていきたいと思う。

吉岡晶子(よしおかあきこ)
お茶の水女子大学附属幼稚園元教諭。

表紙

三段重ねのケーキにたくさんのアリがいる表紙である(画像1)。ケーキはまるで「バベルの塔」のよう。子どもたちが見たら何と言うだろう。「ケーキ食べてるの? 作ってるの?」「何か運んでる」などつぶやくであろうか。よく見ると、ケーキに穴を掘り、リヤカーに乗せて運んでいるアリがいる。身体の向きはどう見ても引っぱり出しているようだ。やはり自分たちの巢に運んでいるのだろう。甘い物好き、働き者、アリの姿である。ケーキの内側は? 数時間たったらこのケーキはどうなるのだろうか? と表紙だけでたっぷり楽しめた。

ありのうた

ページをめくると、「ありのうた くらはしおじいちゃん」がある。

ありのうた くらはしおじいちゃん

ありの からだは ちいさいが

なかなか つよい ちからもち

おもたい にもつを よく はこぶ

つよい ばかりか はたらきて

あつい なつじゅう なまけずに

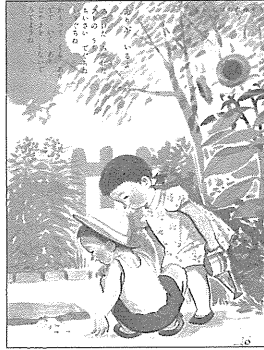
せつせ せつせと せいを だす

表紙の絵と次の見開きページにピッタリの内容である。平仮名で書かれ、柔らかい感じがし、戦前の片仮名文とは印象が違^まう。子ども言葉^{こどもことば}を文字にしたように思わず口にしてみたくなった。「くらはしおじいちゃん」こと倉橋惣三が子どもたちと一緒にしゃがんでアリの見ている姿が浮かび、より一層の温かさが感じられる。思った通り、この詩には曲もついていた(付録「つばめのおうち」^{うた}に掲載)。この後「くらはしおじいちゃん」として書か

れるのは数少なく、他に三回しかない（昭和
二七年六月号、二八年二月号、二九年一月号）。

ありがたいよ

子どもが
二人、地面
のアリを見
ている（画像
2）。表情は
とても楽しそう。



▲画像2「ありがたいよ」
（林義雄 画）

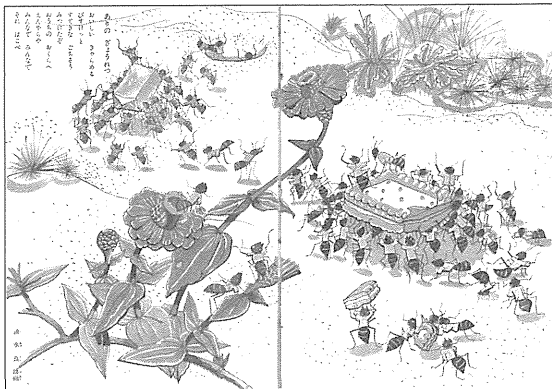
子どもたちはアリが出入りする穴を見つ
め、「どこに行くのかな」「この中はどうなっ
ているのだろう」など思っているに違いない。
子どもが園庭でしゃがんでジーツとしてい
る後ろ姿、毎年見かけるあの姿である。文は、
しばのためぞう氏によるもので、以前に比べ
文章が短く少ない。

ありのぎょうれつ

見開きで大勢
のアリがビステ
ットとキャラメ
ルを運んでいる
場面（画像3）。
ガリバーになっ
たような子ども
の目線で描かれ
ている。

「重そうだねえ」
「このアリ転ん
だ」など、子ど
もたちの会話が
聞こえそうだ。

アリは全員Tシャツを着ており、アリの種
類によってシャツの色が異なる。力を出して
貢献しているアリ、掛け声係、誘導係と役割



▲画像3「ありのぎょうれつ」（清水良雄 画）

を担っている。まるでお祭りのみこし担ぎのようだ。収穫物をせつせと運ぶエネルギーとチームワーク、よく見かける光景である。擬人化されてはいるものの、シャツを脱いだら庭先にいる本物のアリの行列に見える。庭にお菓子を置いてみたくなった。

ありのおうち

地面の中に幾つもの部屋が描かれている(画像4)。「アリさん、お家で寝てるかな」「お菓子をどこまで持って行ったかな」などつぶやいて穴を見ている子どもたちの頭の中はこうなっているのだろう。女王がいたりベッドがあったり、想像力をかき立てられ、のぞいてみたい世界である。

以前、子どもたちと大きな紙にアリの巣を描いたことがある。まさにこのような世界で、ブランコに乗ったり学校があったりした。今ならサッカーをするアリたち、パソコンに向

かうア리를描くかもしれない。子どもたちは、本当は違うということはわかっているが、そうかもしれないを楽しむのだろう。しかし、このページでは、各部屋には「さなぎのへや」「たべもののへや」「たまごのへや」など、想像ではあっても事実をしつかり記してある。

多少擬人化されてはいるが、あり得ないことは描かれていない。指導には国立科学博物館の新村太郎氏が携わり、そこにキングダーブツクの科学の芽、目を願う揺るがない姿勢を感じる。



▲画像4「ありのおうち」(中村千尋画)

ありをかきましょう

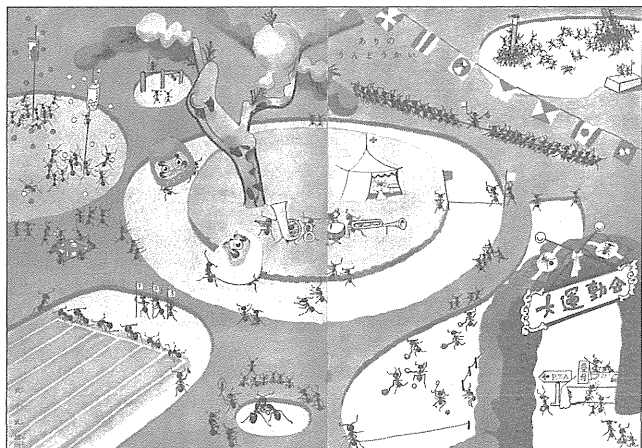
下段に飼い方の文章が歌のように書かれ、卵や幼虫、アリの種類も描かれ、楽しさを含みつつ知識をさりげなく伝えている（画像5）。飼育ケースの絵は「本当にこうなるの？」とやってみたくなるし、実行できそうな気が



▲画像5「ありをかきましょう」（沢井一三郎 画）

する。アリを見ている三人きょうだいの表情が何とも明るい。この時代は三人きょうだいが標準だったのかな、など思ってしまった。

ありのうんどうかい



▲画像6「ありのうんどうかい」（武井武雄 画）

見開きいっぱいには繰り返される大運動会（画像6）。何百匹もいるアリたち、かけっこ、綱引き、スプーンリレー、相撲に鉄棒などあ

ちらこちらでにぎにぎしく競技が繰り広げられ、「ヨイ」「ワッショイ」などの声が聞こえてくる。ボールによじ登って玉入れをするズルアリや、白衣を着た看護師アリもいる。足の踏ん張り方、手の上げ方、顔の向きが絶妙で、それぞれの一生懸命さが動きに表れている。一匹一匹が「これは○○ちゃん」「こっちは○○君」と子どもたちに見えてくる。右下では受付係がプログラムを渡している。

このページは本当に見ていて飽きない。

昔のキンダーブックなのに古くない。今の子どもたちにとっても魅力的であろう。細かい部分、隅っこまでじっくり見たくなり、二度三度と繰り返し開いて何か発見しなくなった。そんな気持ちにさせるページばかりである（個人的には武井武雄の絵に魅力を感じる）。ほかにもアリの生態や外国のアリについて、劇の紹介など多方面からアリをとらえ、関心の広がり示唆している。擬人化された表現は

あってもアリはアリとして描かれ、不自然さを感じられない（戦前には擬人化され宇宙人のような表現も見られた）。キンダーブックの制作に携わる人々は、夢と現実がないまぜになる子どもの感覚を大事にしつつも迎合せず、本物に出合わせたいと願っていたのだろう。その思いが凝縮された本、好奇心をわき起こさせる観察絵本、「科学+絵本」の面白さを再確認した。

「本物は？ 外に見に行ってアリを見よう」。子どもたちがその気持ちになったら、「くらはしおじいちゃん」は大喜びではないだろうか。

注

1 キンダーブックは昭和十九年一月発行を区切り休刊になっていたが、昭和二十年八月に再び第一集第一編が復刊となった。

2 昭和二年第二集から平仮名に変わる。

3 「つばめのおうち」は昭和七年四月号より付録として添付された。

画像にみる「幼児の生活」(1)

— 子どもの遊び場を戸外に (昭和五年) —

浜口順子

(大学教員)

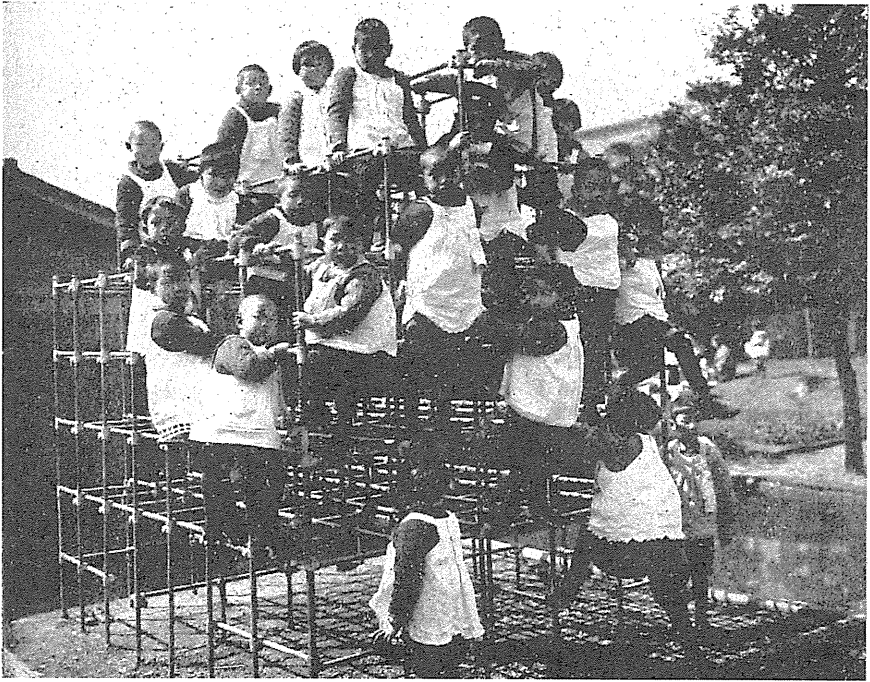
本誌は、一九〇一年に『婦人と子ども』という誌名で発刊されてから、これまで百十年以上、現場の保育者や保育研究者、家庭の保護者などに読まれてきた。現在、二〇一一年

春号までの全巻全ページが、どこからでもインターネット検索で見ることができ。過去の論考や記事を読むと、その時代の大人たちが抱いていた子どもへの思いが迫り、共感したり、時には疑問をも抱きながら、現代に生きる自らの子ども観が反省される。

今回からシリーズで、過去の『幼児の教育』に掲載された画像に着目し、その時代の雰囲気

気に触れ、それを記事にした編集者との対話をしてみたいと思う。

次の三枚の写真は一九三〇(昭和五)年六月号の口絵に掲載されたものだ。「幼児の生活」という題で、四月号から通算十二枚紹介された写真のうちの三枚で、「遠足」という写真以外には倉橋惣三の文章が添えられている。どれも、幼稚園の子どもたちが戸外で過ごす姿である(当時の五歳児の就園率は5〜6%)。大正時代から徐々に、戸外における保育が奨励されるようになっていた。



枠登り

— 幼児の生活 (十)* —

「上へ上へ。もっともつと上へ」

自ら攀^よじて高きに登ることの愉快は、今日の都会の子どもにも封鎖せられた愉快であります。それを補う為に工夫せられたのが、この新しい遊具「枠登り」(ジングルジム)であります。「あぶない」。それは臆病な大人の余計な懸念に過ぎません。この複雑そうに見える枠の間を攀じさせて、強い握力と、自在な全身筋肉の屈曲とによって軽々と登らせてゆくのは、理智の用心よりも、ずっと賢明な本能の安全があります。

登り切って、青い大空に近づくこと四メートル、爽やかな高い風が、小さい勇士の丸い頭を吹いて居ります。

「上へ上へ。もっともつと上へ」(倉橋惣三)

*紙面の都合により、順序を入れ替えて掲載しています。



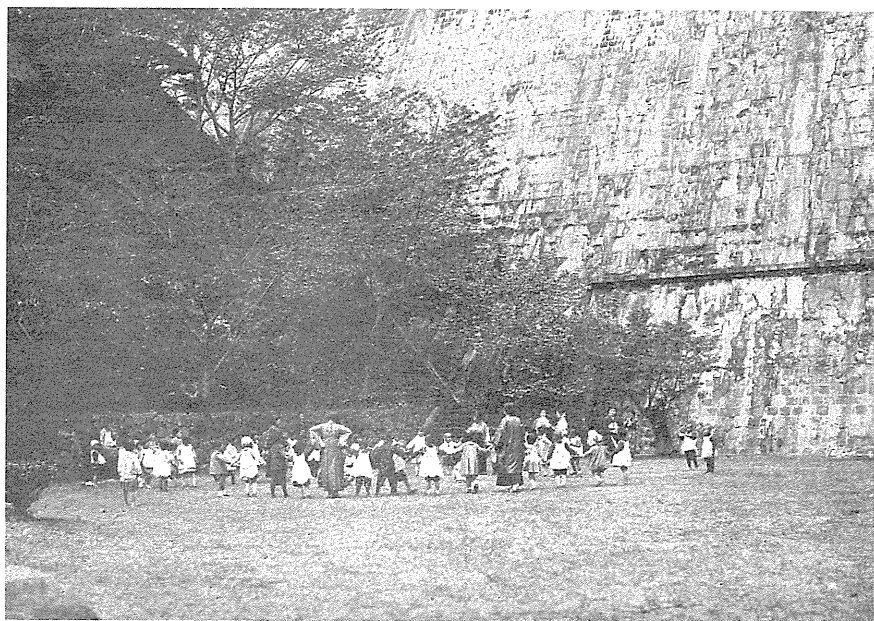
丸 鬼

— 幼児の生活(九)* —

「丸鬼するもの寄つといで」逃げたいのか、鬼になりたいのか、どっちでもいいのであります。溢れ漲る元氣に方向を与え、法則を設けて、その活動満足が一倍深められさえすればいいのであります。幼児達の心の自由は、自ら遊戯の法則の中に入ることによって、聊かも圧さえられないのみか、却って真に自分の自由を満喫することが出来る程に無限に大きいのであります。

(倉橋惣三)

これらの写真と同じ巻に、末田ます(東京市公園課児童遊園掛)による「幼児の遊場」という論考が掲載されている。都市化する社会のはざままで育つ子どもの生育環境への危機感が、医学や心理学などの科学的見地から高まっていたようだ。末田は「光線と戸外の空



▲「遠足」長崎市城山幼稚園

気は彼等の肺臓と心臓を強健にし、自由なる運動は彼等の筋肉を発達せしめ、結核菌其他の伝染病に対する抵抗力を養うのみならず、彼等を快活な精神の所有者たらしむる事が出来ます」と論じている。また「荷車、自転車、自動車の乗入る心配」のないよう「監督者のもとで」遊べる場所が必要であると言い、遊び場という特別な場所の設定が必要な時代になっていくことがわかる。

「粹登り」は「ジャングルジム」「足場やぐら」とも呼ばれ、末田によると、地方にはまだあまり普及しておらず、木製のものもあった。また当時、ジャングルジムに「滑り台を組み合わせたのが流行中」だったそうだ。

「遠足」は大正期から徐々に幼稚園に普及した行事である。近郊鉄道の敷設もその必要条件であった。城跡らしき場所に集う子どもたちの幼稚園は、この十五年後の原爆の爆心地からほど近い場所にあった。

学ぶこと自体への欲求に支えられた現職保育者の学び

— 社会人プログラム「現代保育課題研究」の受講生へのインタビュー調査から —

児玉理紗
(大学教員)

はじめに

近年、保育者の専門性向上や保育の質向上に関する活発な議論に伴い、現職研修の機会の拡大や研修内容の充実が求められている。一九八〇年代後半、森上史朗によって提唱された保育カンファレンスは、園内研修の一環として各園で取り入れられてきた。これまでのカンファレンスの議論では、保育者の力量形成や問題解決の機会としてカンファレンスがとらえられており、熟練保育者や新人保育者を含めた参加者全員の対等性を確保するな

どの方法論に研究の焦点が当てられてきた。^{注1}

しかし、今回筆者がインタビューを行ったお茶の水女子大学社会人プログラムの「現代保育課題研究」の受講生の学びは、単に保育者としての力量形成や即時に応用可能な問題解決的な学びとは異なるものであった。

本稿では、受講生のインタビュー調査結果から、大人の学習者としての保育者の学びを成人学習の視点を援用しながら報告する。

研究の概要

「現代保育課題研究」(二〇一一・二〇一二)

児玉理紗(こだまりさ)
比治山大学短期大学部幼児教育科。

度実施)の受講生十四名に一对一の半構造化

インタビューを行った。「現代保育課題研究」

とはお茶の水女子大学社会人プログラム内の

科目であり、「受講生自身の関心をもとに、

乳幼児の保育や教育に関する問題や、保育現

場などで直面するさまざまな課題について各

自研究テーマを設定し、ゼミ形式で話し合い

ながら研究レポートの作成」を目指す授業で

ある。受講生は現職保育者のほか、元保育者

や他領域の仕事に就く者などさまざまである。

インタビューでは「現代保育課題研究」に

参加するということが履修者にとつてどのよ

うな経験であったのかについて質問した。イ

ンタビュー内容は履修者の同意を得た上でI

Cレコーダーを用い録音し、逐語録にし、修

正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ

を用い分析を行った。分析は現職保育者と元

保育者・非保育者に分けて行っており、本稿

では特に現職保育者に焦点を当て、その一部

を履修者の具体的な語りとともに紹介する。

参加動機——保育の行き詰まり——

履修者の参加動機には、自身の保育経験に
対する相反する二つの評価が共存しているこ
とがわかった。一つは、「保育の行き詰まり」
である。保育実践の中でこれまでの経験では
とらえきれない課題に直面し、行き詰まりを
感じたことが参加動機になっている。一方、
このように保育に行き詰まりを感じ、自身の
保育経験の未熟さを認識しながらも、これま
での「保育経験に対する自尊心」を持つてい
ることも明らかになった。自身の保育経験に
行き詰まりを感じながらも、同時に自尊心も
持ち合わせているということは、大人が学び
直しをする契機として重要な要素であると言
える。

そして、今回の研究で核になる部分である
のが「学ぶこと自体への欲求」である。現職

のB保育者は以下のように語っている。

B あとは経験を重ねたからこそ面白くなってきたんだと思うんですよ。学びと実践が。(略) ねばならないっていうより、何か面白いな、楽しいなっていうか、学ぶことが。

他の語りの部分でもB保育者は、養成段階の学びと比較し、自分自身の学びを振り返る語りが見られた。このように、経験を重ねることによって、依存的状态に近い養成段階や新人のころには抱くことがなかった、学びと自体の面白さを実感していることがわかる。

学びの過程

「現代保育課題研究」に参加する保育者にとって重要な学びは、授業担当者である専門家から指導を受け、保育現場では得ることができない専門的な知見を得たことである。しかし実際に学んだことは、決してそれだけでない。

い。F保育者は以下のように語っている。

F 自分が勉強できる範囲ってある程度限られているじゃないですけど、あれもこれも勉強したいんだけど、やっぱり時間的なものであったりとか、なかなか難しいところで、ちよつと海外の保育についてはあの方が詳しいから聞いてみようとか、あの方のほうが美術に関して造形に関して詳しいから聞いてみようとか、そういうパイプができたっていうのはうれしかったですね。

F保育者が「現代保育課題研究」で学んだことは、自身の行き詰まりに対する解決策だけでなく、むしろ個人の興味・関心を越えた多様な保育の専門的知見であった。従って、「現代保育課題研究」という場合は、問題解決的な学びだけでなく、より広い範囲の知見や情報を獲得できる場であったと言える。

さらに、現職の保育者であるC保育者は、

「現代保育課題研究」を受講した後の変化として次のように語っている。

C 試すっていうか、この子に合ったものは何だろうっていうのでやっていく、もちろんうまくいったことはよかったな、なんですけど、うまくいかなかったこともやってみて気付くことってあると思うので、そういったことがいろいろにやってみようってなったのはよかったのかなって思いますね。

「この子」に対するかかわりがうまくいかないことは、C保育者にとって行き詰まりと感じられるものであり、「現代保育課題研究」の参加動機にもなっていた。しかし「現代保育課題研究」における学びを通して、うまくいかなくても試してみようと感じるようになった。つまり、行き詰まりと感じていた子どもに対するかかわりの難しさを受容し、試してみようという能動的なとらえ方に変化したの

だと考えられる。

ほかにも「現代保育課題研究」における学びについて以下のように語った履修者もいる。

E 再確認じゃないですけど、普段そんなこと全然思わずにやっていることが、皆さんにアドバイスしていただけると、そうそうみたいな、保育士ってやっぱりそう考えるよなっていうことが、普段は全然思わないというか気付かないというか誰にも言われないうし、他のいろいろな現場の方がいて、でも皆保育のことを考えていて、自分の話をしたりした時にそういうふうにとらえられたこと今までないなみたいな、(略)そこはすごい面白いっていうか、本当に勉強になるというか、原点に戻れるというか。

「保育士ってやっぱりそう考えるよな」と表現されているように、現場とは異なるとらえ方が提示されることによって、改めて自身の

保育の原点に触れ、新たにとらえ直すことができたと考えられる。大人は蓄積された経験が豊かな学習資源となっており、経験から得られた学習に価値を置く。また経験は学習によつて影響を受けにくい特性でもある。そのため、大人の学習者は蓄積された経験により、多くの固定した思考のパターンや習癖を有しており、開放的ではない側面があるといわれている。^{注4}しかし「現代保育課題研究」においては、研究という学びを通して、日常性を客観視し、立ち止まる時間を持つことで、自身の経験を開放的にとらえていたと言える。

学ぶことと自体への欲求

「現代保育課題研究」に参加した保育者には、実践における行き詰まりに対する問題解決的な学びへの欲求だけでなく、問題解決という枠を超え、学ぶということ自体への強い欲求が存在していた。また、即時に応用可能な知

識を求めるだけではなく、研究という異質な枠組みを通して日常を客観視することで、自身の経験を再解釈し、子どもとのかかわりを改めて問い直す過程が見いだされた。

成人学習の分野では、二十世紀までの大人の学びとは、社会的役割を身につけ、変化する社会に適応するための学びであるという観点を中心位置付けていた。しかし、変化の激しい二十一世紀では大人の社会的役割が拡大し、役割そのものが必ずしも自明のものでなくなり、新しい社会的役割の創造に向けた学びが展開されるようになってきた。^{注5}本研究で見いだされた、現職保育者の学ぶこと自体への欲求や自身の保育経験をとらえ直していくような学びも、保育者としての役割に適応していくための学びではなく、役割そのものを問い直していく学びであったと考えられる。このことは、個人の力量形成や問題解決の機会とは異なる現職研修のあり方として新

たな示唆を与えてくれる。

おわりに

最後に以下の受講生の語りを紹介する。

でも本当にやっぱり仕事も好きなんですけど、仕事をすると学びたくなる、そっち（注：学ぶこと）って本当はすごい好きで。だから多分学生でいるっていうのが好きなんだろうなって思うんだよね。そういうことを許してもらってる場って私にとってはとっても幸せ。

「現代保育課題研究」の場を学びが許される場と表現したことに、私は大変驚いた。「許してもらえる」という言葉には、大人が学ぶことに対する社会の厳しい評価が見えてくる。しかしそれでも学ぶことにまっすぐに貪欲で、何よりも学ぶことを楽しんでいる「現代保育課題研究」の受講生から、人としての深い学びを教えていただいたように思う。

参考文献

- 1 中坪史典・秋田喜代美・増田時枝・箕輪潤子・安見克夫「保育カンファレンスにおける談話スタイルとその規定要因」保育学研究50(1) pp.29-40 二〇一二年
- 2 お茶の水女子大学「社会人プログラム『変革期の乳幼児教育・保育を考える』」2013.8.23. 2013.8.29
http://www.ocha.ac.jp/news/h250612/poster2_1.jpg
- 3 木下康仁『グラウンデッド・セオリーの理論特性 グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践―質的研究への誘い』弘文堂 二〇一二年 pp.25-34
- 4 M・ノールズ『アンドラゴジーとは何か 成人教育の現代的実践―ベタゴジーからアンドラゴジーへ』堀薫夫・三輪建二監訳 鳳書房 二〇〇二年 pp.33-67
- 5 三輪建二『二十一世紀の生涯学習社会と社会教育の復権 おとなの学びを育む―生涯学習と学びあうコミュニティの創造』鳳書房 二〇〇九年 pp.32-56

幼児の人間関係と保育者のかかわり

— いざこざで起こった泣きの事例から —

柴坂寿子
(大学教員)

幼稚園や保育園での集団生活では、子ども
の間でさまざまないざこざが起こる。保育者
は人間関係を形成する機会としていざこざを
とらえ、多様な状況を考慮に入れながらいざ
こざにかかわる。いざこざ^争の中では子どもが
泣く場合もある。これはいざこざに泣き加
わったさらに複雑な事態である。本稿では、
いざこざの中で泣き起きた時に保育者がど
のように子どもにかかわるのかを、幼稚園の
一年間の観察から検討する。フィールドは二
年保育年少（四歳児）クラス、担任保育者は
三十代で十一年以上の経験者である。

分析の対象は、いざこざの中の泣き事例
31事例である。31事例中、保育者がかかわつ
たのは27事例であった。保育者がかかわつた
27事例において、保育者自身が泣きに気付い
た場合が最も多く18事例、当事者以外の子ど
もが保育者に知らせた場合が5事例、泣いた
子どもを当事者以外の子どもが保育者の所に
連れてきた場合が2事例、泣いた子どもが自
分で保育者に訴えに来た場合が1事例、その
他1事例だった。このように、泣き事例のほ
とんどに保育者がかかわると考えられる。泣
きに気付くきっかけとしては保育者自身と

柴坂寿子（しばさかひさこ）
お茶の水女子大学大学院教授。

もに当事者以外の子どもが重要と考えられる。泣きは目立つ出来事であり、緊急事態を知らせる合図として保育者・周りの子どももの注意を引きつけると言えよう。

以下では担任保育者の対処の事例を検討する。双方から話を聞いて状況を明らかにし、いざこざにおいて非がある子どもにその内容を認識させて謝罪させ、その子ども事情も受けとめて対応することが基本に思われた。

〈事例1〉 二月。たけしの「やめてよ！」と言う声。たけしが泣いている。紙で作った剣を持ったけんが横に立っている。保育者が近づき、けん「何で泣かしちゃったの？」と聞く。数人が近づいてきて様子を見る。けんは剣を柵に差し込んでみせ、「おさむ君がね、もらっていいよって言ったから」と説明するが、おさむはその場にはいない。けんの説明と同時に、たけしが泣きながら柵を指して何か説明する。保育者がたけしに「取ったの？

たけし君のやつを？」と聞く。「もらっていいよっておさむ君が言って、たけし君の取っちゃうの、おかしいじゃない」と言って、保育者はけんから剣を取り上げる。けんは「だってさ」とさらに説明しようとする。保育者は「たけし君はいやだって言ってるんだから」と、けんを説得する。けんは剣を取り返そうとするが保育者は渡さず、「だってさ、じゃない」と、けんの顔を見ながら少し厳しく言う。保育者が自分で剣を作るよう言う。けんは「できないんだよ」と答える。けんは実際手先が器用ではない。保育者は「そうか」と納得し、できないなら作ってあげるからと優しくけんを諭し、謝るよう促す。

けんは保育者が最初少し厳しく対応したのは、このころ、けんが非を認めない態度を繰り返し、それをけんの個人的な課題ととらえていたためと思われる。その後、今回特有の

事情を受けとめ、対応したと考えられる。

いざござは保育者が当事者と一緒に遊んでいても起こるが、いざござが泣きに至る場合は、多くが保育者がいない時なのだろう。そのため、泣きが起こると保育者は状況把握から始めると考えられる。31事例で当事者以外の子どものかかわりを確認したところ、ほとんどの場合、泣いた子どもにのみ状況を探っていた。保育者の特徴は、泣いた子ども泣かせた子どもの双方に状況を探ねる点にあると思われる。泣きへの共感や援助は重要であるが、いざござの原因は別の問題である。保育者は問題を明確にした上で、いざござを本質的に解決しようとすると考えられる。状況要因を十分考慮した対処は、経験ある保育者の特徴とされる。

次の事例では、双方に話を聞いて状況を明確にし、誤解だったことを当事者ばかりでなく、泣かせた子どもを責めていた周りの子ども

にも明確にしている。当事者にはいざござにならないための別の対処を示唆している。その上で、楽しい雰囲気をつくるようかかわっている。

〈事例2〉 十二月。一斉活動で縄跳びをした後、自由に練習する。縄を使い「さめさめごっこ(鬼ごっこの変形)」をする子どももいた。ゆりあが「えりちゃんにぶたれた」と泣く。ゆりあはゆりあを保育者の所に連れていく。保育者はゆりあに状況を聞くが、聞き取れない。保育者はえりに近づき、状況を聞く。周りを数人の子どもが囲む。ゆりあを泣かせたことをりなに責められ、えりも泣いている。保育者はえりに「うなの？」と聞くが、えりは頭を横に振るだけである。保育者がまたゆりあに状況を聞くと、ゆりあは泣きながら説明する。保育者はその説明を繰り返し、ゆりあに確認する。保育者はえりに「えりちゃんをさめさめごっこのお魚に間違えて捕まえちゃつ

「たんだって」と説明し、謝るようにゆりあを促す。ゆりあはしゃくりながらうなづく。保育者はえりの肩に手を置き、「あなたはね、私（さめさめごっこは）やってないの、って言うのよ。捕まえられてびっくりしたの？

縄跳びしてたんだよね」と確認する。えりはうなづく。ゆりが「ぶたないで言葉で言えば」と言うと、保育者は「そう。ぶたないで、私は今縄跳びしてるのよ、って言うのよ」とえりに繰り返し、ゆりに向かって「二人とも思ってたことと違っちゃったんだもんね」と確認する。ゆりはうなづく。保育者はえりの胸に丸を描きながら「お腹の中で考えてたこと見えなかったから。お口で言うんだよ」とえりとゆりあに交互に確かめる。二人ともうなづく。保育者がゆりあを指し、謝るようえりを促し、えりは泣き顔で「ごめんなさい」と謝る。ゆりあもうなづく。保育者は「仲直り」とリズミカルに言い、笑う。りなも笑顔にな

る。ゆりもリズミカルに「アイラブユーで仲直り！」と言い、二人の手を取って「仲直り！よし！」と握手させる。えりも笑顔になる。保育者はゆりあに縄跳びを渡し、「えりちゃんは今、縄跳びを一生懸命練習してるからね。もう夢中になってるから」と再度えりの行動を説明する。

31事例での当事者以外の子どもの泣きへのかかわりを見ると、泣いた子どもに同情的で、泣かせた子どもに非があるとする傾向があった（同様の傾向は Landreth 1941[※]）。そこで保育者は、いざこざの背景や原因、経緯を周りの子どもにも明示し、泣きにのみ左右されるのではなく、問題の本質を理解させようとすると思われる。そして周りの子どもも含め、強い感情を伴う出来事から気持ちを切り替え、遊びに戻れるよう配慮するのだろう。

一方で、泣きが個人的な課題である子ども

に対しては違った対処も見られた。入園当初、泣きの多かったしおりに対しては、泣く以外の選択肢を示唆するかわりが見られた(同様の対処は小原他 2008^{注1}、Landreth 1941^{注2})。

〔事例3〕 六月。ままごとの赤ちゃんをやるよう、ゆりがしおりを誘う。しおりは「どうして赤ちゃん赤ちゃんて言うの？ 赤ちゃんなんて」と怒る。ぺつたりと座って頭を垂れたしおりをゆりがなで「泣かないで」となだめ、赤ちゃんになるといいことがあると説得する。しおりが「わーん」と泣き声を上げ、ゆりはあわてて「お姉さんにしてあげるから」となだめる。保育者は離れたところから「しおりちゃん、泣いてないで、私はこうしたい、って言いなさい」と促す。ゆりがなりた役を聞くが、しおりは答えない。ゆりは「もうエプロン(大人役の衣装)ないしねえ」と困る。エプロンが見つかり、ゆりはしおりに着せる。

泣きは注目を集める出来事であり、保育者の対処は当事者だけでなく周りの子どもにも入る。中島は、保育者の泣きへの対処が変わると子どもの泣きへの対処も変わること示唆した。いざこざで起こる泣きへの保育者のかかわりは、人間関係に関するメッセージが子どもに伝わる重要な契機なのだろう。

参考文献

- 1 小原俊郎・入江礼子・白石敏行・友定啓子「子ども同士のトラブルに保育者はどうかかわっているか—保育者の経験年数・トラブルが生じる状況による分析を中心に—」乳幼児教育学研究 17 pp.93-103 二〇〇八年
- 2 Landreth, C. (1941) Factors associated with crying in young children in the nursery school and the home. *Child Development* 12: pp.81-97.
- 3 中島寿子「幼稚園児の友だちの泣きへの対応」聖ヶ丘教育福祉専門学校紀要 17 pp.53-67 一九九七年

遊びの中で育つ「心」と「体」の健康

～運動における動きの多様化と洗練化～

宮里 暁美
(大学教員)

幼児期は、生涯にわたって必要な運動の基となる多様な動きを幅広く獲得する大切な時期である。多様な動きは、いわゆる「運動遊び」という範疇はんちゆうにとどまらない多様な遊びや生活の中で、心と体を存分に動かすことを通して、獲得されていく。平成二四年に策定された幼児期運動指針でも、遊びや生活の中で多様な動きを体験することの大切さが強調されている。さらに運動指針の中では、多様な動きを獲得する上で重要なこととして、「動きの多様化」と「動きの洗練化」の二つの方向性が挙げられている。

「動きの多様化」とは、年齢とともに獲得する動きが拡大することである。幼児期に獲得していききたい基本的な動きとしては「体のバランスをとる動き」「体を移動する動き」「用具などを操作する動き」がある。一方「動きの洗練化」とは、年齢とともに基本的な動きの仕方がうまくなっていくことであり、「力み」や「ぎこちなさ」が見られる状態から「滑らか」になっていくことである。

「動きの多様化」と「動きの洗練化」という二つの視点は、幼児期における動きの獲得について検討していく上で重要な視点ではない



かと考える。そこで、この二つの視点から幼児の遊ぶ姿をとらえ直し、多様な動きの獲得につながる環境や援助のあり方について検討することとした。実践事例は、前勤務園（お茶の水女子大学附属幼稚園）でのものである。

静と動を往還する遊びの中の「動きの多様化」

事例1 コマと一緒に回りだすA児

コマがなかなか回らないことにいら立ちながらも挑戦し続けたA児。ようやくコマが回ったその瞬間、A児の体はコマと一緒に回りだしていた。コマ回しをするA男の体の動き

を細かく見ていくと、実に多様な動きを体験していることがわかる。座り込んでコマにひもを巻き付けている時、指先は適度な強さと柔らかさでひもを引いている。ひもを巻き付けている

手とコマを持つ手は、リズムを合わせ調和した動きをしている。ひもを巻き切ったコマを、意を決して投げる瞬間、ひざを少し曲げ、素早い速さで手首を返す。そしてコマが回った瞬間、喜びながらその場を旋回している。

事例2 シェイクしながら色水作り

戸外の机を囲み、ペットボトルに水と実を入れて色水作りをしている子どもたちがいた。水は薄いピンク色に染まり、さらにより濃い色を出そうと考えたB児がペットボトルを上下に振り始めた。すると他の子も振り始め、「シェイク、シェイク」という掛け声が出てきて、そのリズムに合わせてジャンプが始まった。笑いながらジャンプしていたかと思うと、一人が駆けだすと後を追うように全員が走りだし、大きな木の周りをグルグル回りだした。何周も回り、「ストップ」の合図で全員が止まった時、子どもたちの手には、見事

に泡立った色水入りのペットボトルがあった。

色水を作り始めた時は、実をつぶしている

指先に集中し、色が出る瞬間を見逃さないという集中した体だった。その状態からペットボトルを振るといふ動きへ、そしてジャンプが始まり、手を振ることと「シェイク」の言葉のリズムが響き合う中で、走り出すという動きが生まれていったのである。

〈動きの多様化につながる大切なこと〉

静から動、動から静へ、集中から拡散、さうらに集中へと、子どもたちの遊びは生き物のように変化していく。変化を支えているのは、心の動きに合わせていつでも動きだせるような場の設定、互いの心の動きを感じ取り響き合える仲間関係、幼児の体が思わず動きだすことを大切にしている保育者のかかわりである。これらの条件が整っている時、子どもたちの遊びは躍動し、多様な動きが生まれてくる。

道具を使う生活の中に見る「動きの洗練化」

事例3 デッキブラシを手に持って

幼稚園には水遊びの季節だけ水を流す川があり、水遊びを始める前には、年長児が中心になってデッキブラシで川底を洗うことに取り組んでいた。張り切って力強く川底をこする年長児の姿に興味を持ち、年少児もやりたがり、年長児が使い終わったデッキブラシに手を伸ばすことがよくあった。

年少児とデッキブラシとのかかわりを見ていくと、まず手に持つことの喜びがあり、引きずって歩いたり、片手で使ってみたりなど、いろいろとやってみていた。そのようなかわりを重ねる中で、次第にちょうどよい力の入れ具合をつかむようになっていく。夏の終わりごろになると、腰を入れてゴシゴシとこする姿も見られるようになっていた。まさに、動きが滑らかになっていったのだ。

〈動きの多様化と洗練化を生み出す道具〉

お茶の水女子大学附属幼稚園では、平成二五年度、子どもと道具とのかかわりに着目して研究に取り組み、その中で『「もの」の持つ特徴に触発されたり、傍らにいる友達の間で「もの」に惹かれたりして、「もの」を使い始めた子どもたちは、何度も使ってみることで、その「もの」の特徴や用途を身体を通して理解していく。「もの」の使い方を知り、「もの」を「道具」として遊びの中で使い始める』というプロセスを明らかにしている。

体得とは、体で理解していくというわかり方である。「もの（道具）」の特徴や用途を身体を通して理解していく「プロセスの中で、「もの（道具）」の使い方を知った状態とは、「動きが滑らかになる」状態を指しているように思う。やりたいことを思いつき、そのために道具を使う生活の中で、動きの洗練化が生み出されていくのだと考える。

それぞれの道具には固有の用途がある。こする、集める、持ち上げる、かき混ぜる、掘る、振りかけるなど、道具の用途は多様な動きそのものである。日本古来の優れた道具は、滑らかな体の動きを引き出す力を持っているように思う。

幼児は身の周りの環境に興味を持ち、かかわることを通して成長していく。そのかかわりを支えているのが「道具」である。多様な体の動きを生み出すことにつながる優れた道具を、幼児が手に取ることができるように生活の中に取り込んでいくことで、動きの多様化や洗練化が実現していくのだと考える。

参考資料・引用文献

- 1 「幼児期運動指針」幼児期運動指針策定委員会
- 2 平成二五年度研究紀要『探究力・活用力が発揮される生活（二年度）「道具」持つ・遊ぶ・活かす』お茶の水女子大学附属幼稚園 P24

お便り

POST

◇前号「本棚」の筆者から◇

上野で長谷川等伯「松林図屏風」が公開され、その前に立つ機会を得ました。

流れる霧の向こうにあるいは濃く、あるいはほのかに松林が見え隠れています。踏み込めばたちまち霧に包まれます。霧が流れているのか、見えていた木がふと隠れてしまうのです。等伯は場所による霧の濃淡とともに時間の流れさえ描き込もうとしたようです。

ふと形の似た木が重なって見えてきました。前方にギザギザの葉を茂らせた木がくっきりと、後方にはぼうっとよく似た木が寄り添っています。別の木か、それとも霧の流れに応じて姿を見え隠れさせる一本の木を二度にわたって描き込んだのか。まるで木が振動しているようです。そうなると激しく走る筆によるあの葉も、等伯が運動そのものを表現しようとしたものに見えてきます。

やがて微細な揺れが画面にもたらず振動が、こちらの身体にも伝わってきました。絵に「共感」したというとは違う。あえて言えば「共振」したところでしょうか。身体の深いところで屏風とともに小さくふるえる自分を感じたのです。

数日後、AKB48の楽曲に乗って踊る少女の映像を見ました。ダウン症の彼女は一見ゆっくりと、マイペースで身体を動かしています。けれどその身体の中では小さく、かつ速度を伴って激しく「共振」が起きているのを感じずにはいらませんでした。

身体の中で起こる変化に、私たちは敏感でいるでしょうか。前号で『ヘレン・ケラー自伝』をめぐる保育者の身体を「随っていく身体」と表現しました。それは子どもの考えや行動を尊重するというだけでなく、子どもの中で生起している変化に「共振」する身体にほかならないのです。(佐治 恵)

絵本の紹介

『せかいでいちばんつよい国』

デビッド・マッキー作／なかがわ ちひろ訳

光村教育図書 2005年

余計な解説はいらない気がするので、以下あらすじのみ。大きな国の大統領が、「世界中の人々を幸せにするために」世界中を征服しようとする。自分たちになることが、世界中の誰にとってもよいことだと信じているのである。次々と他の国と戦って征服し、最後に、あまりにも小さいのでほうっておいた国に、征服しないで残しておくのも気持ちが悪いので、戦いにいく。ところがその小さな国には軍隊がない上に、大きな国の兵隊たちをお客様のように歓迎した。もてなされて、することもない兵隊たちは、小さな国の人々の仕事を手伝うようになり、大統領はたるんだ兵隊たちに腹をたて、母国へ送り返し、別の兵隊たちを呼び寄せるが同じことの繰り返し。とうとう見張りを何人が残して国へ帰ると、母国の様子が今までと違う。兵隊たちは小さな国の料理を作ったり、遊びをしたり、服を着て楽しそうにしている。大統領は、「どれもこれも戦争で敵からぶんどってきたものだから」と自分を納得させる。その晩、大統領が息子に歌を請われて歌った歌はどれも、その小さな国の歌だった。(KT)

お茶大子ども学ブックレットの紹介

お茶の水女子大学 ECCELL 企画のシンポジウム、フォーラム、特別講義などを記録した冊子の4冊目。Vol.4 第6回お茶大 ECCELL 子ども学シンポジウム これからを生きる子どもたちへ～津守眞氏からのメッセージ～【話し手：津守眞（お茶の水女子大学名誉教授）、聴き手：高橋洋代（立教女学院短期大学名誉教授）】

実費（500円＋送料）にてお付けします。ご希望の方は、ECCELL事務局 nyuoyji-info@cc.ocha.ac.jp までお問い合わせください。



編集後記

ハナミズキ、キンモクセイ、イチヨウ……。季節の移り変わりを感じる花や木はたくさんありますが、長い冬の後に訪れる桜の季節が来るたびに、やはり何といっても、この木が一番好きだなと感じます。新しい第一歩を踏み出そうとする心持ちにぴったりと合うような気がしてなりません。さあ、今年度は皆様にとって、どのような一年になるでしょうか。

平成27年度の『幼児の教育』は、大きな枠組みはそのままに、内容の一部が新しくなりました。「実践研究」では、郡司明子先生の「育休日誌」の連載が始まります。お子さんと過ごす日常の中での発見と感動が郡司先生のキラリと光る感性で語られています。キンダーブックの連載は三年間にわたり浜口順子先生が執筆担当でしたが、今号からは毎号違う人が担当し、新たな視点で読み込んでいきます。初回の吉岡晶子先生の言葉には保育者のまなざしが随所

に感じられ、思わず子どもと共に読んでみたくなりました。「幼児の教育アーカイブズとの対話」の新連載も含め、歴史への興味もますます深まりそうです。河邊貴子先生の新連載はご自身の幼少期のエピソードから始まりました。「豊かさ」の奥深さを感じさせる言葉に、今後の連載が待ち遠しくなりました。

私事ですが、このたび本誌の編集委員となり初めての春を迎えました。一読者として学生時代初めて『幼児の教育』を読んだこと、また新任保育者としてがむしゃらに過ごした一年を振り返り「保育ノート」の原稿を書いたことが、懐かしく思い出されます。

「子ども学の源流を次世代につなぐ」という信念をしっかりと引き継ぎ、たくさんの方々を読んでいただけるような誌面作りに貢献できればと願っています。どうぞ今年度も『幼児の教育』をよろしくお願いたします。(HT)

次号予告 幼児の教育 夏号 2015年6月刊行予定

新企画、新連載が好評! 充実した内容でお届けします。

特集 保育現場で気になるコトバ考 6
—「自然体験」って何だ?— 大澤 力氏ほか

シリーズ 子どもが育つ場所から
「あそんでほくらは人間になる」(広島県・かえて幼稚園)

コーナー 古典の散歩道 第6回 中村俊直氏

※タイトル・内容が変更になる場合もあります。

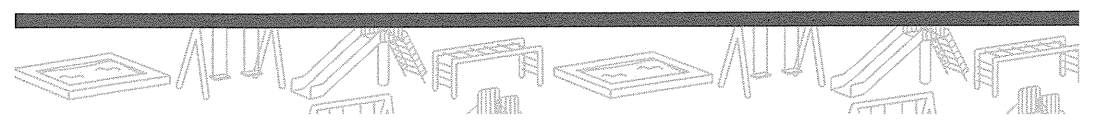
幼児の教育 春号 第114巻 第2号

平成27年4月1日発行
編集発行人/浜口順子
編集担当/田中恭子
発行所/日本幼稚園協会
〒112-8610
東京都文京区大塚2-1-1
お茶の水女子大学附属幼稚園内

発売所/株式会社フレーベル館
電話:03-5395-6604(編集)
振替/00190-2-19640
印刷所/図書印刷株式会社
定価/本体834円+税
©日本幼稚園協会 2015 Printed in Japan

編集委員/伊集院理子
菊地知子
高橋陽子
灰谷知子
編集協力/フレーベル館

●ご購入のお問い合わせは、フレーベル館までお願いします。03-5395-6613(営業)●



内閣府・文部科学省・厚生労働省の公式解説書



34530

幼保連携型認定こども園
教育・保育要領解説

(平成27年2月)

内閣府・文部科学省・厚生労働省／著

21×15cm 346ページ 定価 本体249円+税

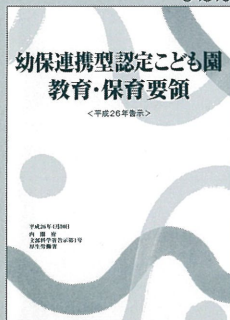
平成26年に告示された「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」の内閣府・文部科学省・厚生労働省による公式解説書。オール2色刷。

おすすめのPOINT

- ①表紙は、人気イラストレーター・かいちとおる先生の絵！
- ②オール2色刷で見やすい！
- ③インデックス付きでわかりやすい！

おすすめの関連書籍

34510

幼保連携型認定こども園
教育・保育要領 (平成26年告示)

平成26年告示の「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」の全文を掲載。

フレーベル館／編
定価 本体150円+税
21×15cm 32ページ

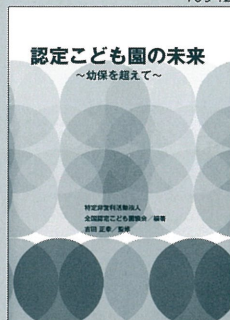
34520

はじめの
幼保連携型認定こども園
教育・保育要領ガイドブック

子ども・子育て会議会長 無藤隆先生による、新法令理解のためのガイドブック。

無藤 隆／著
定価 本体1,000円+税
26×19cm 128ページ

10942

認定こども園の未来
~幼保を超えて~

全国からよりすぐりの24園の事例と、研究者・有識者による制度や事例解説を掲載。

特定非営利活動法人
全国認定こども園協会／編著
吉田正幸／監修
定価 本体2,400円+税
21×15cm 280ページ



子どもがもらって
すぐに使える字典

はじめてつかう

漢字字典

小学校6年間で学ぶ漢字を学年別に示しました。子どもの生活や学習に必要で、よく親しまれていることばを選んで作られた字典です。絵を見ただけで漢字の意味と形と読み方がわかる「絵場面」など、新しい工夫も充実！ 全ての漢字にふりがな付き。

商品コード 303-50 定価 税込1,000円 (本体926円+税8%)

村石昭三/監修 首藤久義/編著 坂崎千春・井上雪子/イラスト
浅葉克己/古代字 祖父江 慎/デザイン

セット内容 本体1 ビニールカバー付き 規格 22×15cm 400ページ
ISBN 978-4-577-81372-0

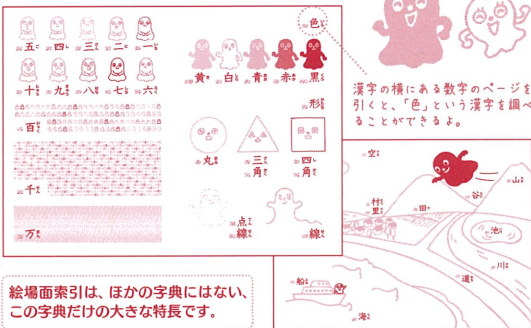
幼児から使える
字典の決定版です！



POINT1

1年生や幼児でも引くことができる

巻頭に、読みや画数、部首がわからなくても、絵から漢字を引くことができる絵場面索引付き。自分で字典を引く自信がつかえます。絵場面索引は、1、2年生で習う全ての漢字を取り上げ、漢字の意味やたらきに応じて、漢字同士の関係がわかるようになっています。



絵場面索引は、ほかの字典にはない、この字典だけの大きな特長です。

POINT2

部首索引にもひと工夫

部首索引を工夫し、引くときのイライラを少なくしました(部首・部品索引)。例えば「思」「安」は…。

思

田

本来の部首である「田」から引くことができます。

心

部首ではない「心」からでも引くことができます。

安

宀

本来の部首である「宀」から引くことができます。

女

部首ではない「女」からでも引くことができます。

※全ての部品が引けるわけではありません。よく目立つ、代表的な部品を厳選して索引にしました。